

1940

目次

序文

I—IV

第一段 心性にかゝる二つの軸

1

一、物と心

1

二、存在と表象

2

三、眞理性 (資料—形式軸)

8

四、二つの相 (直観—概念軸)

11

第二段 存在学の定礎

16

一、序奏

16

二、カント哲学の黄金の鍵

27

三、カント哲学の体系的整備

86

四、易とカント哲学

90

第三段 存在学体系

101

第一部 先験的位置論

107

第一章 立身 先験的位置論(圓式)リーマン幾何学に依る

第二章 先験的認識論(圓式による)

第三章 存在学の原理論(圓式による)

第四章 存在学の演繹論(圓式による)

第五章 主観的演繹論(純粹言語学)

第六章 客観的演繹論(純粹自然科学学)

序文

アレキサンダーの夢は、言語と文明とでしつかりと

結ばれる世界的帝國の創建であつた。其の願望は憐く

も打挫かれ、次いで神の道ことばと帝國とが据えられた。ル

ネツサンスはしかし此の稜角体系をも更に粉々と打碎

く。「<sup>ゴ</sup>と<sup>ゴ</sup>」は決して人類の終局的紐帯とはなり得ない。

と謂ふ悲觀論が、一部理想主義者達の間に行はれても

る。永い接觸のうちこゝろに滲み出て何時知れず融け合ふ

民族の氣分と謂ふ稜角に、かへつてお互を緊密に

結び付ける素因がひろんでゐるのではなからうか。

ントからゲイテへ——論理より生へ。等と人々も叫ぶ。

然し信号燈は赤と出てゐる。如何なる權利に基づいて

「カントから」と言ひ得るのか。

\*

汚水のしたゝる裏街の土塀にも、苔の新緑がある。

ふと眼を見張る稜角其の美しさは、しかし忍び強い日

々の管爲にひろむのだ。一瞥には手堅く粗暴な程の自

然も、灰かに崩え出でては斯くも麗しい大氣を放散す

十行 廿四字詰



山下清

No. 曲五田正子 II

る。アランの感受も一度はカントの体系に粉々と打碎  
 かれて在り、バレリーの「エトセトラ」の底には涙ぐまし  
 き「数え挙げ」の骨組が隠されてゐる。其處から滲み出て  
 るのはじめてあり美しさがあつた。かすかな心の趣  
 きをも其の儘に打傳へる慇懃さ、それから良き注意力  
 などと謂ふものは極めて望ましいに違ひないが、迫ら  
 ぬない一元性は一應のものたるを出でない。如何に美  
 しい結晶を成してゐたとして、惱みの深まりを有たぬも  
 のには尊さが無いのである。特異兒童の絵画とか天才  
 少女の作文などは、ときたま成人に見られぬ鋭き美  
 を内めかせほしても、真に尊いもののみの有る得る磁  
 味を打出すことは出来ない。脳髓の裏側にいつ迄も附  
 着して離れない空虚な後味も、其のあたり起因する  
 ものと思はれる。マチス、ピカソなどが、あの簡勁な  
 色彩と変形とで優に造型美の深みをつたへ得るのは、  
 幾度となき解体と積み換え、建直しを其の背景に有つ  
 からだ。

\*

若人を遠く高く馳り立てる生命の漲りは、其處のみ  
 に閉ぢた思念の体系を峻拒しはするが、刃の匂に凝

十行 廿四字節

Kyoto University



らむとする者は、徒に波に弄れて果はいづくともなく

霧散する砂鉄の運命に、強い戦慄を感じないであらう

か。一度は火に燻られ、一度は鎗にたかれ、否幾度

となく其の試練に耐えぬいて、無限の生命を内深く蓄

へよう、と決意しないうであらうか。

吾々は、先人達の残した巨大なる思惟体系に直面し、

驚異し、動揺し、思索更に消化して、再び他の体系へ

と突進する。激しい戦だ、しかし又誇らかな凱歌でも

ある。其處に突入り、戦ひ抜き、血みどろの片股を引

摺りながら、でもひるまずに静謐な朝あしたをひたぶるに切

闘かう。

\*

樹の固を透す朝の陽射しが、結ばれ合つた玉と成つ

て流の面に其の影を落してゐる。其處には、生命の氣

の凝つてせ、らぐ谷間があるのだ。かたわらの深きし

げみに、白百合はゆら／＼と咲き匂ひ、ゆるやかに山

壁を這ひ登る朝もやにふと眼を注ぐ時、赤松の幹はや

わらかな感觸をおし当てる。すべては終りを告げた筈

だ、しかし見よ、今こそ將に凡ゆるものか胎動への萌

しを孕んで深く息づいてゐる。竹。あまぞのなご意欲

闘い疲れた両足を其の清流にいたした、

十行 廿四字書

Kyoto University



は不定芽の様に柳へることが出来ない。其れが眞午に  
 榮え、午後を経て夜に長け、遂には朽ち果てるものと  
 しても、其の様を見透し、<sup>す</sup>す何か先見の誇とでも言  
 ふべきものを提えて、一ツの内発をかき立て、<sup>す</sup>すは  
 おかたない。けれども、此の朝へは、いとも激しき争闘  
 のあることが忘れられはならない。エドムント・フツ  
 セルは、其の生涯を斯かる戦に捧げ盡して後、<sup>純</sup>粹意  
 識の領域を獲取した。カントは、<sup>純</sup>粹悟性概念も、そ  
 して更に<sup>先</sup>験的自由の領界を。吾々は此の様な領域を  
 も突破し、より豊かた、より広き國土に、より輝かし  
 い朝を迎へむと希ふ。先人達の朝は吾々の朝ではなく、  
 生命のせ、らぎは更に<sup>エ</sup>の流動ではな<sup>い</sup>。其の静謐  
 に、其の清流を掬せよし、無機物の類たですら科学を起  
 えて谷川に神秘を注ぐ。あらゆる便法と人智とを起  
 えた人類契合の素地は、果して其のせ、らぎに求め得  
 ないであらうか。



中一段 心性にひそむ二つの軸

一 物と心

自然への~~畏~~ 怖、天力に張り詰められた瞳、——其れ

は吹き荒ぶ風足を見つめ、深く裂罅ひびの入った地面に吸

ひ着けられる。だが、たゞの風足、たゞの地面は日常

には嬉々たる木立でありゆたかな母の腰でもある。人

間は其の様なものを見つめるのでは無い。其等のまの

は、其の際に何事をも認めず且語り得ない。貪いて其

の底を流れる力、斯様な~~畏~~ 怖の情感を強く波打たしめ

る力、人向う心性と地面との縫合点をひたひたと~~塵~~ 塵し

流れる不可抗の力、其れが彼の亀裂と其れを見つめる

者とに~~滲透~~ し、一つの機会に凝つて、可みつめるそのまの

と成るのである。然し此の事は、見つめる者がたゞに

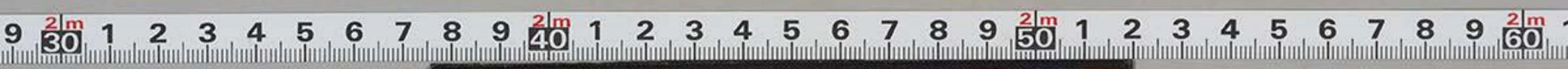
現在の吾であり、見つめられるものが単に今在つて何

時かは消え失せる亀裂であると言ふ事を意味しはしな

い。見つめる者と見つめられるものとの問題は、其の様な外殻

のみに閉じたことではないのだ。見つめる者と見つめ

十行 廿四字



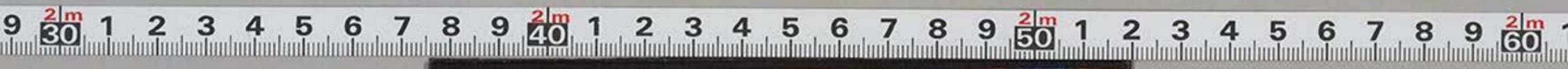
られるものごとが、<sup>可</sup>みづめる<sup>と</sup>固く喰ひ合つた統合を見  
 せながら、<sup>可</sup>しかえりくまで、<sup>見</sup>つめる者——見つめら  
 れるものとして各自の地歩を譲らな<sup>い</sup>所に存在<sup>の</sup>過程  
 の真烈さも生れるのである。

二、存在と表象

や、数理的方面におもむくが、<sup>可</sup>と謂ふ<sup>は</sup>概念的に暫く  
 思考を集中してみたい。<sup>可</sup>と謂ふ<sup>は</sup>分量的にのみ  
 考へられることは恐らく不可能であり、  
 其れは何等か

関係的存在として考へられなければならない。  
 の線分に就いて見れば、<sup>可</sup>其れ<sup>の</sup>起<sup>点</sup>、<sup>可</sup>終<sup>点</sup>、<sup>可</sup>中<sup>間</sup>の<sup>可</sup>い  
<sup>つ</sup>が<sup>可</sup>其れ<sup>の</sup>真<sup>等</sup>として考へられる。然し乍ら其の極な  
<sup>可</sup>其れ<sup>の</sup>可能性に就いて全称的に考へられるならば、  
 特定線分に関し込められると謂ふことはなく、<sup>可</sup>かへつ  
 て斯くの如き特定線分を其れの一軌跡若しくは一偶有  
 として限定する。他方此の極な<sup>可</sup>線分<sup>の</sup>側から考  
 へられると、あらゆる可能性中特に斯かる特定様相に  
 自己を限定せられるもの——<sup>可</sup>実在<sup>を</sup>斯くあらしめるもの——  
 |と見做される<sup>可</sup>↑<sup>可</sup>ポロジ<sup>の</sup>概念的注目するならば

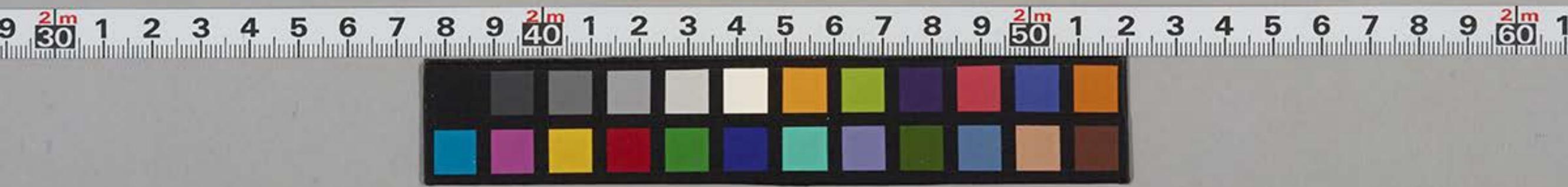
十行 廿四字箱





に自己の位置を有つのであるが、夫々の位置に於いて  
 かへつて其の線分を位置づけ、線と謂ふ現象的存在様  
 式に依存しつゝ、同時に其の事自身に於いて依存対象を  
 斯くの如き存在たらしめる。  
 吾々の或る先人は、不可知の实体を「ゴス」と名付け、  
 其れが如何なるものであるかは知らぬが、<sup>鬼に角</sup>宇宙の  
 規則的営為を掌る力と考へ、最早其の由因を向ふこと  
 の出来な<sup>い</sup>初源の原理であった。其れは現実世界  
 に於ける現象従りはいめて推理され得るものでありな  
 がら、<sup>た</sup>實に斯様な現象を斯かるものたらしむる所以で  
 あると考へられた。現象は<sup>が</sup>物、<sup>の</sup>みの自存の状態では  
 なく、吾々に於ける物、<sup>の</sup>受け取り方<sup>を</sup>言ふのである  
 限りに於いて、其れは両つ方向を具體してゐる故に、  
 吾々は其れに於いて初めて自己と外物、及び外物相互、  
 自己相互の向に行はれる規則的關係を意識し且認識し  
 得るのであり、現象なき場合、<sup>ゴスの如き</sup>斯かる存在は無意味で  
 不可能である。此の様に現象に就いてはいめて把  
 握され其の存在を確認され得るものであるにも拘らず、  
 然し現象をして斯くあらしめる所以のものと考へらる  
 るものに於いて、<sup>ゴス</sup>ゴスとは<sup>ゴス</sup>ゴスと類似した性格を具へてゐ

十行 廿四字詰



る。『靈魂』は、歩く人、坐る人、吠える犬、走る犬など  
 現実の存り方を通して其の現れる相を各々異にしな  
 う常に其の底に横たはる同一の或者として考へられ  
 『個体』(基体)と謂ふのは、燃えたり、凍つたり、泣いたり、  
 笑つたりなどしつゝ、或同一性を保持する存在者の、  
 統一的地盤として求められた極限概念がある。其れ等  
 はひとしく先に述べた『桌』の様な性格を有つものとして  
 『実体』と言はれる。アリストテレスは、『実体』といふこと  
 は、  
 即ち、  
 本質、  
 普遍者、  
 類、  
 の各々が実体として考へら  
 れ、  
 第四には基体が実体として考へられてゐる。(概而上  
 学・乙・三) と言つてゐるが、一は『靈魂』、二、三は『ゴス』、  
 四は『個体』に当たる。吾々が此の章に於いて『実体』と謂ふこ  
 との追求を此の様に重視するのは、吾々の論究が一に  
 『存在』とは何ぞやと謂ふ問題に向けられてゐる。其處に  
 は存在と謂ふことが根柢的且原理的に把握せられぬが  
 乏らぬのであるが、  
 『存在』と云ふことは、  
 多くの意味  
 において云はれつゝ、  
 然かもその本来の意味において  
 は、  
 云ふ迄もなく本質を云ふのであり、  
 られは即ち  
 実体を意味する。(概而上学・乙・二) のであり、  
 『存在』とは何

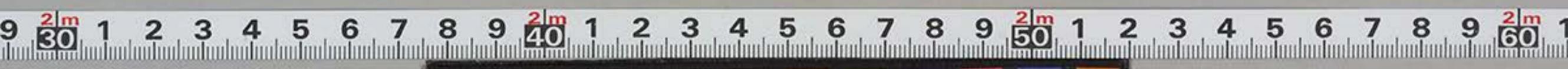
十行 廿四字結

Kyoto University



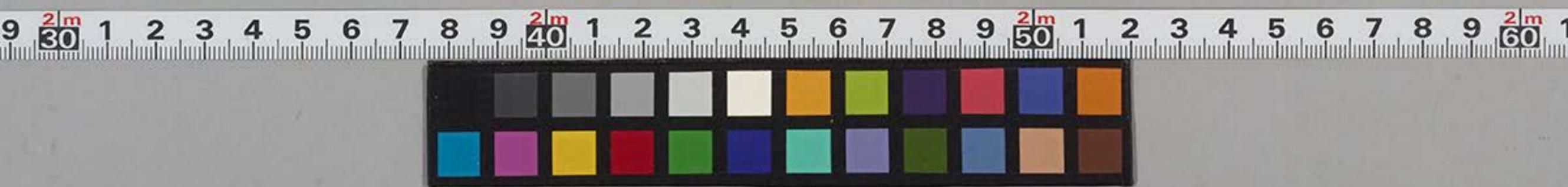
欲<sup>レ</sup>的行爲に依<sup>リ</sup>て説明せ<sup>ら</sup>れる。其<sup>ノ</sup>様<sup>ニ</sup>行爲<sup>ノ</sup>最<sup>モ</sup>
 付<sup>け</sup>ら<sup>れ</sup>る<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>と<sup>ガ</sup>考<sup>へ</sup>ら<sup>れ</sup>、其<sup>ノ</sup>政<sup>に</sup>一<sup>ツ</sup>の<sup>レ</sup>付<sup>け</sup>ら<sup>れ</sup>る<sup>レ</sup>
 の<sup>レ</sup>線<sup>分</sup>は源<sup>初</sup>的<sup>的</sup>意<sup>味</sup>に於<sup>い</sup>て其<sup>レ</sup>を表<sup>出</sup>す。而<sup>し</sup>て
 其<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>理<sup>由</sup>は又<sup>レ</sup>極<sup>め</sup>て似<sup>通</sup>つた性<sup>格</sup>と運<sup>命</sup>とを有<sup>つ</sup>てある
 れ<sup>て</sup>ゐ<sup>る</sup>。其<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>漢<sup>字</sup>で現<sup>す</sup>と<sup>レ</sup>理<sup>の</sup>文<sup>字</sup>に當<sup>た</sup>り、
 リス<sup>ト</sup>テ<sup>レ</sup>リス<sup>の</sup>学<sup>問</sup>的<sup>的</sup>方<sup>法</sup>が、自<sup>然</sup>の勢<sup>と</sup>して行<sup>は</sup>
 知<sup>ら</sup>れ得<sup>る</sup>所<sup>の</sup>もの<sup>を</sup>認<sup>識</sup>す<sup>る</sup>(形<sup>而</sup>上<sup>学</sup>・乙<sup>・三</sup>と謂<sup>ふ</sup>ア
 處<sup>か</sup>ら次<sup>中</sup>に進<sup>み</sup>行<sup>く</sup>こと<sup>に</sup>依<sup>つ</sup>て、直<sup>接</sup>そ<sup>れ</sup>自<sup>身</sup>に
 各<sup>々</sup>の者<sup>自</sup>身<sup>に</sup>と<sup>つ</sup>て知<sup>ら</sup>れ得<sup>る</sup>以<sup>外</sup>にそ<sup>れ</sup>自<sup>身</sup>に於<sup>て</sup>
 是<sup>は</sup>殆<sup>ん</sup>ど知<sup>ら</sup>れ得<sup>る</sup>こと<sup>の</sup>な<sup>い</sup>もの<sup>か</sup>ら出<sup>発</sup>し、其<sup>レ</sup>
 在<sup>者</sup>間<sup>の</sup>関<sup>係</sup>を言<sup>ひ</sup>表<sup>す</sup>様<sup>に</sup>なり(例<sup>へ</sup>ば<sup>レ</sup>比<sup>喩</sup>、終<sup>に</sup>
 自<sup>存</sup>的<sup>な</sup>関<sup>係</sup>自<sup>体</sup>を意<sup>味</sup>す<sup>る</sup>様<sup>に</sup>もな<sup>つ</sup>た。其<sup>レ</sup>處<sup>に</sup>は、
 との関<sup>係</sup>を媒<sup>介</sup>す<sup>る</sup>もの、と謂<sup>ふ</sup>意<sup>味</sup>か<sup>ら</sup>あ<sup>ら</sup>ゆる存
 体<sup>とは</sup>何<sup>れ</sup>を<sup>云</sup>ふこと<sup>に</sup>外<sup>なら</sup>ぬ(全<sup>く</sup>か<sup>ら</sup>い<sup>て</sup>ある。
 せ<sup>ら</sup>れ、常<sup>に</sup>疑<sup>問</sup>の對<sup>象</sup>である<sup>レ</sup>問題<sup>は</sup>、換<sup>言</sup>せば、実
 ざ<sup>ら</sup>ず、口<sup>ゴ</sup>ス<sup>は</sup>元<sup>こ</sup>と<sup>は</sup>を意<sup>味</sup>した。其<sup>レ</sup>は人<sup>と</sup>人

十行 廿四字詰



シムポルな類型を求めらるれば、食物が見付かつて食  
 べたい！と謂ふ食本能の湧く場合が考へらる。其  
 の食物と意欲主体とは、瞬向的に或は方で結ばれ、其  
 の際速度(念)と謂ふ事がオ一に内めいて時時空の両は一  
 と成り、結合の通路は即刻且最短距離に於いてひしつと  
 頭に焼き付けられる。然し其の実行は、種々の制約に  
 依つて、一定の時間と或空間的無駄とを踏んで為す水  
 ぬばならない。此の様な場合、意欲と行動との一致が  
 眞の理想として高く掲げられる。支那に於いては、現  
 實の道なり理なりが直観に於ける其れ自体に迄高めら  
 れたとき、<sup>理論</sup>及<sup>論</sup>が実践の最高なる理念を示す言葉と  
 なつた。其處に到る事情は又、<sup>カ</sup>ゴ<sup>ス</sup>に於ける場合と  
 略同様であると考えてもよい。次いで其の様を表象  
 此處に先づ存在者を知ること、更に存  
 に於ける相関者としての<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>れ自身を知ること、  
 在者(客)相互、自己相互、存在者及び自己の關係たる  
<sup>カ</sup>ゴ<sup>ス</sup>を知ることに、而して現実のそれと直観に於ける  
 極限概念としてその水との關係を知ることに、<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>向<sup>カ</sup>の  
 生活にとつて最も重要なこととなつてくる。此の事は  
 しかし人間の思惟性を前提としてみる。

十行 廿四字



思惟は主体と外物との直接な<sup>ひび</sup>みから生ずるので

はなく、主体内に於ける<sup>可</sup>感受性<sup>人此處</sup>は狭く、即ち心

理学で言はれる受容細胞層より求心神経系統及び其の

の中程ありて思ひうがゞてみ<sup>て</sup>欲し<sup>て</sup>と<sup>自</sup>発性<sup>と</sup>

の間に於ける<sup>可</sup>ひび<sup>み</sup>であり、思惟が唯一つの相に止ま

るべきでない以上、其の<sup>可</sup>ひび<sup>み</sup>は安定であることは許

されないから、一方に自己の同一性を保持しつつ、二者

感受性<sup>自</sup> | 自<sup>自</sup>發性<sup>の</sup>のうちいづれかは変化に參與する者で

ありねばならない。日常の観察に照らし、又單に其の

名称に就いて見ると明きらかな如く、感受性<sup>は</sup>正しく

其の様なものである。然らば、斯かる感受性<sup>Rezeptivität</sup>

と外物との直接な<sup>可</sup>ひび<sup>み</sup>から生ずる感受内容即ち現象

*Erkenntnisweg* と、既述の如き間接的<sup>可</sup>ひび<sup>み</sup>である思惟<sup>イテ</sup>カ

ルトの用いた様な幅広き意味に於いて<sup>て</sup>とは、一体如何

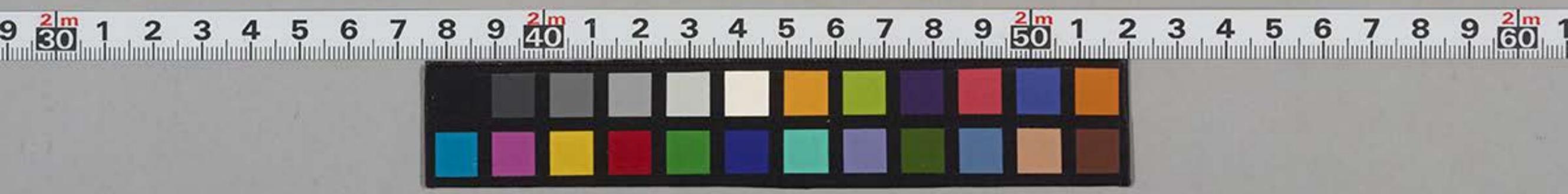
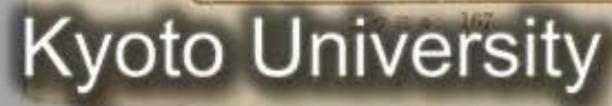
なる關係を有し、<sup>目</sup>其の各々は何なる様相を有する

であらうか。

三、眞理性

新田義貞の場合を考へて見る。寄り集ふに機會と態

十行 廿四字 結



勢とは、 羣がる軍勢を矢継早に馴り立て、 其の白熱せ  
 る尖端は今や流星の如く稲村ヶ崎に突入した。 然し一歩  
 手前には、 満々たる海水が溢えられ、 此處迄燃  
 え熾つて来た焰を、 此の重大な接点でかき消さねばな  
 らないのが。 、 、 義貞はすつくと立ち上り、 個々の  
 者を燃し續けてゐる焰を嚴かに黄金の太刀に移し採つ  
 た。 全軍が、 彼の手に捧げられた太刀をふと仰ぎ視た  
 時、 其の心内に燃えさかる焰を其の儘其處に見出たし  
 たのであつた。 太刀は海中にはしと投げ入れられる。 引  
 續いて起つた干潮の現象は、 太刀の魔力否兵連の偉力  
 其物の外部的障阻に對する高き勝利を象徴した。 徐々  
 に退き行く潮足を辿りながら、 將兵は心の内に敵軍の  
 敗退をすらも描き出したに相違ない。 時向の空白と行  
 動の滯滞に伴ひ勝たふりゆる不利が、 其處ではかへつ  
 て高らかな進軍の譜に奏へられ、 其の故にあつた。 其の  
 自然の現象を、 彼の太刀の故にすると言ふことは確  
 に一つの迷愛であらう。 けれども、 自然現象と太刀に  
 こめられた氣遣との深い契合が生み出す一つの感情、  
 其れと其處より興るべき兵連の逞しき思念、 などに義  
 貞が視点を据えてゐたものと、 實に深い、 眞

十行 廿四字



理が彼に依つて示されたのである。真理性は、存在者

（広義）——主観、客観等の視方向を撤回した場合を考へ

て欲し、相互に於けるロゴス性の判明を把握に存する。

其れ故又認識論的に言へば、真理性は外物（超越者）と感

受性、感受内容と其れが統一的先驗意識と謂ふ二つ

の基本的関係類型に就いて向はるべきものでなければ

ならない。吾々は一見類別的な斯かる二つの関係型を、

人向う心内深く隠された一つの軸を以て貫き、其れを

質料——形式軸と名付けた。心性に關して變化しな

いものの、即自發性の根柢を成す理念的純粹我とも言ふ

べきものの形式の極点に考へられ、感受性に對待し、

其れと結びつみをなして感受内容と在るべき先驗的對象

（物自体）が質料の極点に考へられる。此の事は「真理とは

何ぞや」と謂ふ古い有名な問題を解決せんが為の基礎的

手續に屬するものである。此の場合に、真理性とは認識

とその對象との一致である、といふ名称の説明は許容

され前提されて居るが、人々の知らんと欲するのは個

々の認識の真理性の一般的にして確實なる徴表は左ん

であるが、といふ事である。（Kant, K.d.r.V. B. 82）

十行 廿四字

Kyoto University



四、二つの相

最後に、右と同様の使命を有つ他の一つの軸——  
観——概念軸（又は「Eシス——ノEマ軸」）が如何様

な性格を有ち、如何なる姿をとつて現れるかと謂ふこ  
とに就いて述べよう。

問題の性質上、近代の文明社会に於いて最も緊迫し  
た要求をもち、且心性の深みに觸れる精神療法に就い

て考へて見た。即ち、分析的とも言ふべき療治の方  
法が近頃、到つて著しく發達せしめられたが、其れは

療治のあらゆる可能性を患者の特性的機能に介け入つ  
て詳細に調べ挙げ、其處に見出された主要要素を他

の總てを投げうつて注目すると謂ふ方法を採る。重  
要な事は、斯様な方法に於いて指摘され得るものが顕

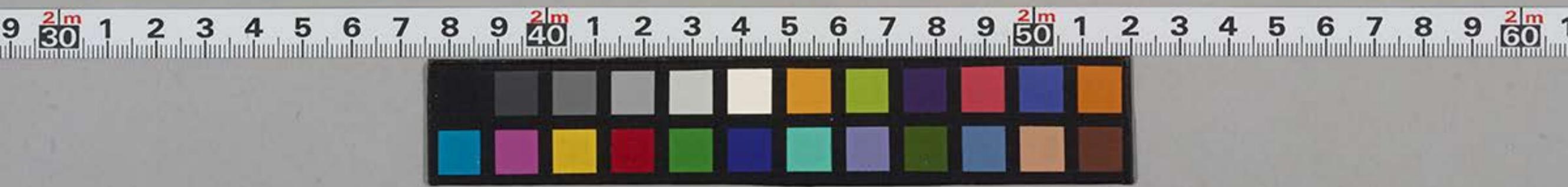
著なるもの、みに限られねばならないのに反して、精  
神の秘密は寧ろ極めて顯著ならざる、底深く隠され

た、微妙な面にひろんでゐる、と謂ふことである。  
教え挙げは、如何程精妙に行はれても完全さを盡くす

事が出来な。難点は、(一)教え挙げと謂ふものは極め  
て危つかしい、(二)教え得るものが眞の根であることほ

十行 廿四字書

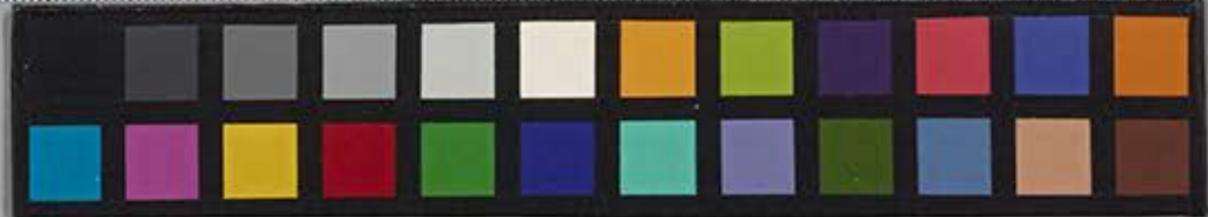
Kyoto University





領域に於いては指挿することが出来ず、科学万能と  
 宗教的信仰、理論主義と実践主義、等は殊に顯著な類  
 型でありうる。前者は実行に先立つて行為の可能性を分  
 析する。其の際、整合の爲に無理と切捨とが行はれ、  
 可能要素を互に種々の能力集團が夫々認同せられるに  
 つれて各自は孤立的となり、渾然の力は抜き去られ、  
 意力の稀薄化は統一を破局にあとし、いれる。幾重にも  
 偏跛にされた後に生れる理論は、当然適確なものでは  
 あり得ない。之に反して後者は、直覺的に定められた視  
 念と全体を持ち上げ、ぐんぐんと其處へ力を加へる。  
 諸機能を統べる太綱が一糸にしつかりと結び付けられ  
 てゐるので、巨大な力と沸騰する血汐とがあらゆるに  
 のを其れへ向け、融合する。敢然たる信頼と万策を盡  
 くしてもし制ぎることの出来ない意力とは、一瞥の不可  
 能をすべて解決する。「雨滴も巖を貫く」と謂ふのが、其  
 處の標語である。一つ一つの雨滴には、如何様な分  
 析と計算とを加へても、其れだけの力は見出だし難い。  
 然し其れにも拘らばず、其の内には斯くも大きな仕事か  
 確実にひそんでゐるのがある。一見では摘發され得な  
 い能力が此の様な實現を示すのだ。「お前は最う駄目

十行 廿四字詰



此の二つの軸が人間の心性に於いて如何に必然反  
 例はいくらでもある。通常、の医者では、到底斯かる余  
 カを洞視するは出来まい。又、医者達は、時間ぎめの保  
 乳を奨めるが、母の愛情は規則を超えた規則をたへへ  
 てあるものであり、其のまめやかな氣配りにこそ嬰兒  
 の發育には最も適切な規則が管まわつてゐるのである。  
 前章に述べた「資料」——形式軸が、其の両端に多神教と  
 一神教とを生みつけるものとすれば、此處に述べた様  
 な「直観」——概念（又は「エシス」——「エマ」）軸は、其の両  
 端に啓示宗教と自然宗教（又は辯證法的）と言はれるへい  
 ゲル流の發展様式を思ひ浮べるならば、其れの完成形  
 態としての「理神論」乃至「汎神論」、佛教に就いて言ふな  
 らば浄土門と聖道門と謂ふ神的存在者に対する両つ  
 の態度を生ずるものと思はれる。人類と宗教とが如何  
 に切離し難きものであり、野蠻の民、文明の民、あら  
 ゆる氣候帯を通じての人類を一貫して上に述べた様  
 な宗教のいづれかバ——例へ典型的に截然と別ち得る  
 ものとしてではなくと——常に存在すると謂ふ事實

十行 廿四字



ものがあり、且如何に主要性を成すものであるが、  
 謂ふ事の明確な證左と成るであらう。吾々の如く理論  
 的体系を目指す者は、<sup>「</sup>アテイトイ製の<sup>」</sup>理性の秤<sup>」</sup>ではか  
 得ないものは、<sup>「</sup>エルサレム製の<sup>」</sup>秤<sup>」</sup>ではからねば  
 ならない。<sup>「</sup>合<sup>」</sup>は筆者の記入<sup>」</sup>と謂ふ非合理主義者シエス  
 トフの実存的思惟を特に此の章に关联して深く汲み取  
 らねばならない。

十行 廿四字紙

Kyoto University



中二段

存在学の定礎

一 序奏

吾々は、  
第一段に於いて存在と謂ふものを種々の側

面から考察した結果、  
其れを貫く二つの軸を極荒削り

にではあるが取出すことが出来た。  
然し乍ら、  
其れに

は掘りたての鉱石の様に、  
土を附々<sup>をま</sup>たり有害な不純

物も混じつてゐる。  
其の稜<sup>をま</sup>存生の自然性と謂ふものは、

理論の根柢に缺く可からざるものではあるが、  
洗滌と

精錬とにこそ学向の使命乃至本義が課せられてゐる。

其れ等のものを理論的判明さに於いて把握し、  
存在学

構成の骨組にもなさうと考へる吾々は、  
此の二つの軸

が果して其の稜<sup>をま</sup>存に耐え得るか否か、  
其の数は必然

であるか、  
如何にして其れは斯かる体系を構成し得る

か、  
等の問題提出を通じて学の定礎を行はなければなら

ない。  
其の事は、  
然し乍ら浅学な一思索者にとつて

勝ち過ぎた負擔である。  
吾々は其の故に、  
歴史上の種

々な時代又は異つた國々に於ける偉大な觀想者達の助

十行 廿四字詰



力を得て、一面には理論の普遍性を他面には其水の厳密性を期すべきであり。其水等の手續は、広範に亘り過ぎたり哲學史の隅々に迄眼を配ると謂ふ様な事であつては、煩雜なばかりで有益な成果はあさめ難いから、人類史上に高く聳ゆる二つの峰を選ぶ、其處を據卓として其等を取巻く連山を一望の中におさめつ、考察を進めたい。

二つの峰とは、頂点を孔子及びカントに有つ東西の兩思索体系を指す。

孔子を頂点とすると言つても論語を中心とした儒教思想のみを意味するのではなく、寧ろ伏羲に興り文王・周公に於いて完成し孔子に於いて其の哲理を深められ、又何等かの仕方で儒教、道教をはじめ諸子百家にも取入れられ、互に思想全般に滲透し、他方には民族一般に於ける慣習要素と迄成つた易の思想を言ふのである。其水は實に東洋史を貫く巨大な体系——民族の血汐が昇華して生み出した靈妙な結晶——である。古へ伏羲が天下に王と爲り、仰いで天文を觀俯して地理を察し、此處にはじめて八卦を畫し、文王は彖辭周公は爻辭を作し、次いで孔子は十翼を作つたと言ひ傳へられる。

十行 廿四字詰

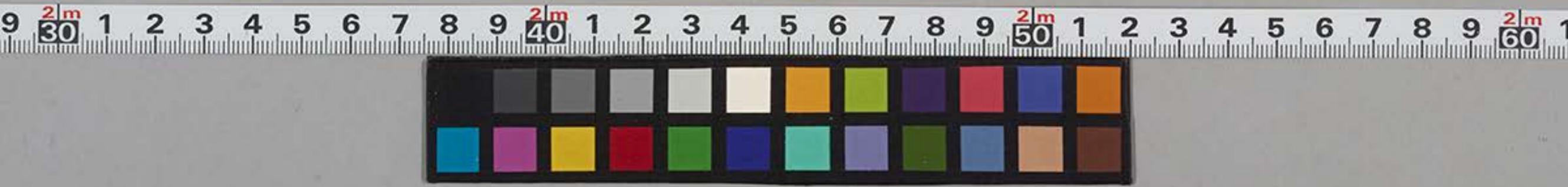
Kyoto University



上古に在つては伏羲 中古には文王、周公、 近古に在つ  
 ては孔子、 故に漢書は藝文志に「人は三聖を更へ、 世は  
 三古を歴たり。」と稱する。 孔子は又、 匡の災厄に際し  
 て、 文王没したれども、 文茲にあらざるや。 と絶叫し、  
 ゲッセマネに於けるイエスの祈禱にも似た其の必迫せる  
 言々に、 彼の心奥深く秘められた使命感を 激しく吐  
 露してゐる。 鬼に角、 周子、二程子、朱子等支那思想の大  
 成者たる宋学の大家及び江戸時代の日本儒家達が、 如  
 何に易の思想に関心を有ち且有たぬばならなかつたか、  
 陰陽五行の説が如何の程に支那及び日本の習俗を支<sub>記</sub>  
 したか、 等と謂ふことを考へ合せるならば、 易の思想  
 が東洋的基調に於いて構成された一大思索体系として、  
 又羣山を抜いて聳ゆる一鋭峰として、 吾々の論実據点  
 たり得ることか確認せらるべきであらう。  
 他方カント哲学は、 近世のもたらした最高にして最  
 大なる思索的收穫であり、 且ヨーロッパ民族の有した全  
 哲学系列の完成体系でもある。 彼の後にはフヒテ・シエリ  
 ング、殊にヘーゲルと謂ふ偉大な体系家達が出てをり、  
 ヘーゲルの体系こそは ~~終~~<sup>正</sup>に吾々の目標に適ふものでは  
 ないが、 と考へらるる節もあるが、 彼の 壯麗な建築物

十行 廿四字

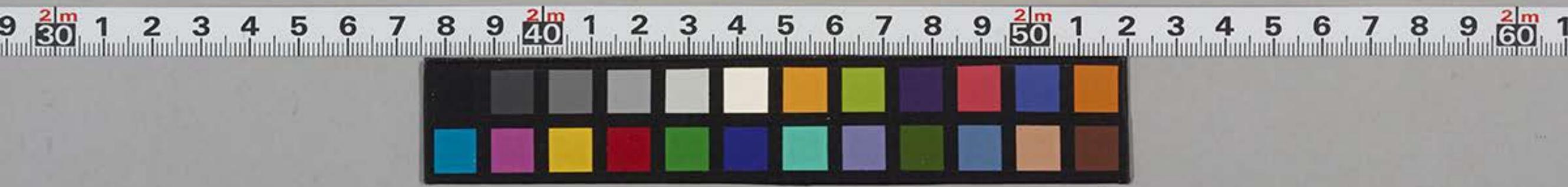
Kyoto University



に對しては、寧ろ藝術的側面より深き偉敬の念を捧げ  
 るに止めたい。既に嚴正なる科学の熔爐を経未った筈  
 の十九世紀哲学としては、<sup>〇</sup>熱狂せる構想力の産物乃至  
 学向的嚴密性を缺くものと言ふ類の正当なる非難に對  
 して、何等の回答をえ保持してゐないかに思はれる。  
 ヘーゲルは、其の青年時代を歴史及び神学の研究に捧  
 げ、其の頃より民族的情熱に溢れしめられた。其れに對  
 してカントは、未だ成長しない理性を、~~假~~象の世界に  
 遊ばしめることを禁じて、自然科学的探究に沈潜した  
 青年であつたし、又生涯コスモポリタンとしての自  
 覺を失はなかつた普遍的精神を有つ哲人であつた。  
 「カントは永遠なるものに對する澄んだ、激情なき眼を  
 有する。彼は彼以前以後の偉大なる体系<sup>建</sup>建設家達の  
 中に於いては恰も、酔へるものの中に於ける醒めたる  
 ものの如くである。(N.ハルトマン) <sup>フ</sup>イヒテの知識學に對  
 しては既にカント自身「かゝる學が果してどの程の利益  
 を齎すかは殆んど期待できない。(一七九七・四・五) <sup>テ</sup>イフト  
 ルンク宛書簡) と言つてゐる様に、不整合なる批判哲  
 學を体系的完成にえたらさんとした彼の<sup>壯</sup>大な意圖も、  
 極端なる觀念論的一面性<sup>の故に</sup>に於いては否定されねばならな

十行 廿四字

Kyoto University



い。ドイツ観念論者達の驚異的体系群は、批判的諸業  
 蹟に於いて完遂せられた形而上学の定礎<sup>△</sup>として現れ  
 得べきあらゆる将来の形而上学の<sup>▽</sup>予備学<sup>▽</sup>に其の盡き  
 せぬ源泉を有つものではあるが、其の後此等の体系群  
 に對する不信と諸学派の迷混とが期せざして「カン  
 トへ歸れ」の声を生んだと謂ふ事實は、未だ其等に依つ  
 てカントの体系が充分には汲み盡くされてゐなかつた  
 こと、否寧ろ歪曲して成長せしめられてゐたことを、  
 他方には、カント哲学の探突指標にこそ眞に求めらる  
 べき哲学<sup>△</sup>の本質が存するのではないかと謂ふことを指  
 示する。十九世紀後半より今日に至るハイデン・マーブ  
 ルヒ両学派及び現象学派<sup>△</sup>何等かの仕方が對象論とも交  
 錯する<sup>▽</sup>の輝かしき業績、殊にコーヘン・フッセル等の嚴密  
 なる学的体系、ハイデッガーの豊かなる構想、は広い河  
 幅と成つてカント哲学に朝宗するのである<sup>△</sup>ハイデン  
 派のヴァインデルバント・リッケルト及びマルブルヒ学派の  
 一ヘン・ナトルプ・ホルトマン等は彼等の屬する学派が  
 新カント派と總稱される處からしてカント哲学の後  
 継たることは直ちに承認されるであらうが、フッセル及  
 びハイデッガーに就いては其の主義上からいふ多々の異論

十行 廿四字

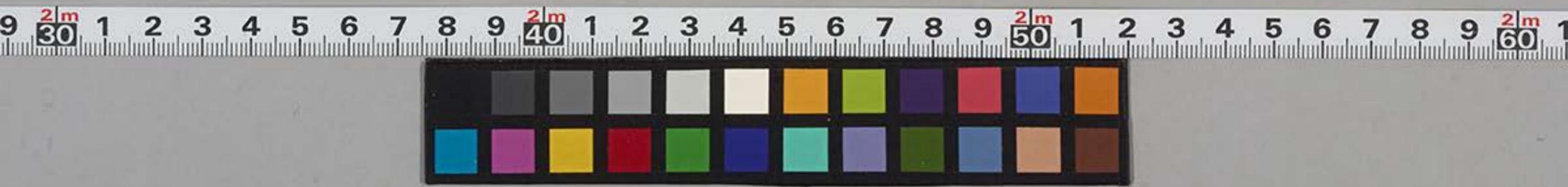
Kyoto University



が予想せられる。然し乍ら、フッセルの主著「純粹現象学  
 及び現象学的哲学の理念」には「假令カントは猶ほ未だ此  
 の分野を奪取するを得ず、且つ又それを独自の嚴密な  
 る本質学の研究分野として認めざるを得なかつたとはい  
 へ、彼の心眼は此の分野を凝視してゐたといふ事が明  
 々證的となる。それ故、例へば純粹理性批判第一版の  
 先驗的演繹論は、本来既に現象学的地盤の上に展開さ  
 れてゐる。(中二篇、中四章、六二)と謂ふ言葉があり、又リ  
 ツゲルト「認識論」サリサフセル「現象学」の探求を経て独自の  
 存在論を打ち立てたハイデッガーは、其の著「カントと  
 形而上学」が体系第二部をなすとも言はれてゐる程にカ  
 ントを深く汲み取つてゐる。然し批判体系は如何にし  
 て其の様な深さと広さとを得たのであらうか、カ  
 ントの定礎が其の様に確固たり普遍的たり得る所以は  
 いづくに求めらるべき存在するのであらうか。  
 青年期に於けるカントの明星は、ニュートン及びライ  
 プニッツであつた。「運動及び静止の新たななる学説」と謂ふ  
 論文に一應の終結を見せる<sup>当時</sup>の思索は、ベールコン・ガリ  
 レイに興つてニュートン・ライプニッツに極盛を誇つた新興  
 思想に集注せられる。其處では、経験の地盤から飛び

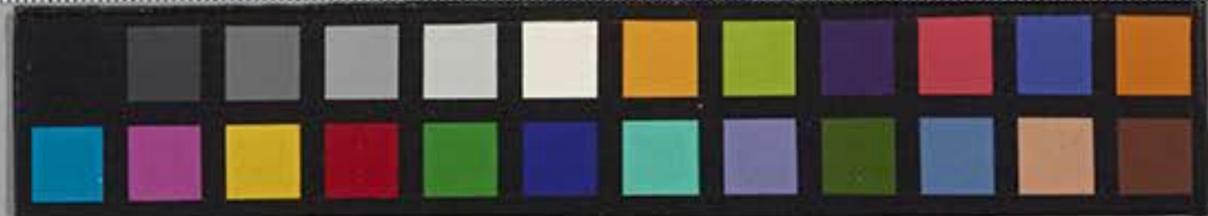
十行 廿四字

Kyoto University



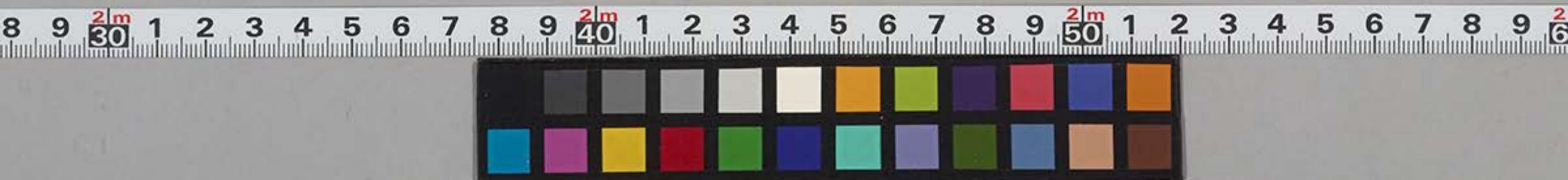
去ることを許さない厳格な悟性の訓練が行はれ、其れ  
 に伴つてルネッサンスに波打ちはじめた新思想の動向  
 が幅広く受け容れられた。ニュートンはガリレイを徹底  
 せしめ、ベークンの理論も実践に依つて充實し、完全  
 な自然哲学の体系を提出する。ライプニッツは既に幼少  
 の頃よりスコラの教養と新興科学思想とのギャップに悩  
 み、如何にかして両者を統一せんやと思案に思案を  
 重ねた結果、有限な経験的存在にひそむ無限の先天性  
 乃至神性、宇宙性を對應及び表出の思想に於いてとらへ、  
 微分概念に依る記号的把握を経て、形而上学敘説、單子論  
 の如き先天論的存在学の構想を展開した。ルッソー、ロク  
 ヒューム等に依る著しき思念の動搖は、遂にカントを導  
 いて批判的方法(可感界並に可想界の形式と原理)の確  
 立、續く十余年の沈黙の後「純粹理性批判」の大成に迄至  
 らしめたが、其の体系の中にはニュートン・ライプニッツの  
 業績が批判的に嚴正な形で太く織り込まれたのである。  
 「純粹理性批判」がニュートン物理学の基礎づけであるとは  
 一般に言はれらるることであるが、かゝる「批判哲学」の  
 研究が假令数学に新生面を與へ得ないにせよ、然し逆  
 に数学は其方法及び發見的原理を、これに附隨せる要

求並に缺陷とともに省察して、純粹理性の批判並に測  
 定に新機軸を出し得るしまた純粹理性に其の抽象的概  
 念を表現すべき新しい手段すらも、つまりライプニッツ  
 の『普遍的記号の組合せ法』に類似せるものすらも與へ得  
 るものがあるといふ期待を全然棄ててはみません。(一七、  
 九一・九二七・ベック宛書簡)と謂ふカント自身の言葉は、  
 斯の有名な範疇表及び其水を骨子とした理念表等と思  
 ひ合はせられるならば、ライプニッツの所謂『普遍的数学』の  
 理念も其の多様における統一の思想(悟性新論及び『單子  
 論』と共に如何程彼の主著を支配してゐたかを察知せし  
 める。又近世哲学の開拓者であるデッサカルト及び其の一  
 つの土地を耕したものと云はれるスピノザも忘れられ  
 てはゐない。彼が、『最大のしかし望むらくは無益なら  
 ざる、労苦を要した』(第一版序言)と言ふ『純粹悟性概念の  
 先驗的演繹』は、『一方面は純粹悟性の對象に關係し、  
 一、他方面は、純粹悟性自身をその可能性と純粹悟性  
 そのもの、根柢を成す認識力とに關しに考察したものの  
 であるが、其處では、彼のデッサカルトが極みなき懷疑試  
 行の極處に於いて到達し得た『我思ふが、統覺の先驗的  
 機能として』凡ての悟性使用の最高原則(B.17)とせられ、



「思惟と延長との對立に於ける統一の提向も歴史的な  
 解答を得<sup>てゐる。</sup>」物の秩序及び連結は觀念の秩序及び連結  
 と同一である。(エチカ・カニ部定理七) 故に觀念と物とは  
 永遠に分れてゐるが、併しそれ等の関係法則は同一で  
 ある。と謂ふスピノザの存在論も此處に根柢的なる基  
 礎づけを見出すであらう。然し又先驗的論理学は、ア  
 リストテレースに於いて略完成の域に達しスコラ哲学  
 に依つて徹底せしめられた形式論理学に深い根柢を有  
 することゝが、純粹悟性概念の形而上的演繹と言はれて  
 ゐる部分に依つて知られる。彼が「体系的位置論」と稱し  
 批判哲学の礎石ともなした範疇表が、形式論理学の判  
 断様式を体系的に構成することから得られたと謂ふ事  
 實は、將に其の事を指示してゐるのである。「純粹悟性  
 概念は、上に掲げた表に於てあらゆる可能的判断の論  
 理的機能があらたに数だけ發現する。」「吾々はこの  
 等の概念をアリストテレースに倣つて範疇と名づけよ  
 うと思ふ、といふのは吾々の意圖はそれ等の實現に於てア  
 リストテレースのそれとは全く違ふたけれども本  
 来は一律であるから。(B.105) 形式論理学と「範疇」とは其  
 儘の形に於いては拒否されつゝ、原理的な深さとして

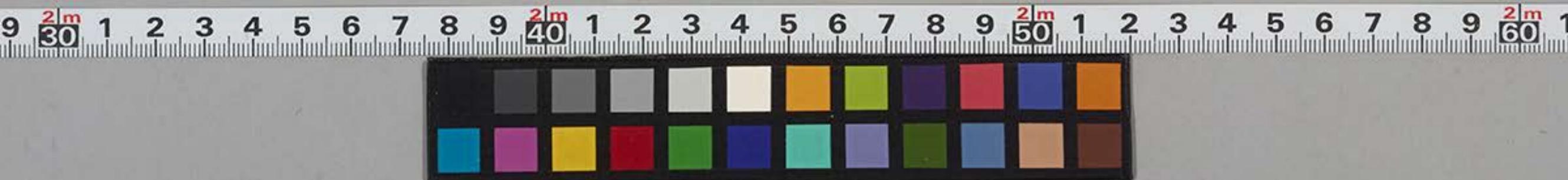
十行 廿四字詰



広さを加へて彼の哲学体系の中に蘇生せしめられた  
 ののである。斯くの如き論究は、カント哲学をして西方  
 思想の焦点的位置たらしむるに何等の躊躇をも與へな  
 いと考へる。  
 吾々が学の定礎に於ける理論的手續の據卓として選  
 んだ斯かる兩思想系統は、一は孔子の著と傳へられた  
 「十翼」、他はカント哲学の基礎理論を展開する純粹理性  
 批判に於いて体系づけられ且理論的嚴正さを確保する  
 のであるが、前者は東洋思潮一般の特性を反映して、  
 直観性には深い所謂科学的論證性に缺くるところがある。  
 其れに反して後者は、直接に雄大なる藝術的構想を  
 うつたへはしないが、確實に一步步礎石を築き上げ  
 て行くと謂ふ卓中者で、理性の高揚には未だ日の浅  
 い吾々にとつて最初の據卓ともなり得るのである。斯  
 くて後のものに依り理論的に精鍊せられた彼の二つの  
 軸は、民族性、風土、思念類型等を著しく異にし、寧ろ對  
 極的とも考へらる地盤が形成せられた理論体系の試  
 鍊に、果して如何程迄耐え得るか、其等の軸は其處に  
 於いても亦体系の基本的骨組たり得るか、等の提問を  
 終て、定礎の普遍性と嚴密性とに極み及ぶ確信乃至證

十行 廿四字數

Kyoto University



三  
を  
六  
へ  
る  
が  
あ  
ら  
う。

十行  
廿四字

Kyoto University



四、易とカント哲学

(イ) 八卦圖と先驗的位置論

※

此處に八卦圖と言ふのは、世に伏羲の先天圖と稱せ

られりる有名な圖式を指す。周子の通書に記されりる聖人の精

は卦を畫して以て示さぬ、聖人の蘊は、卦に因つて以

て發せらる。卦畫されば、聖人の精は得て見ること

からず。卦微なかつせば、聖人の蘊は殆んど悉くは得て

直く可からず。易は何ぞ止たに五經の源りみならんや。

其ハ天地鬼神の奧が。(精蘊才三十) と謂ふ言葉を省み、

十翼の繫辭上傳に書かれてある、神由く、書は書を畫し、

聖人象を立てて以て意を盡し、卦を繋けて以て情偽

を盡し、辭を繋けて以て其の言を盡し、爰じて之を通

いて以て利を盡し、之を鼓し之を舞し以て神を盡す。

と謂ふ言葉を味ふならば、其れが恰もカントの言ふ、

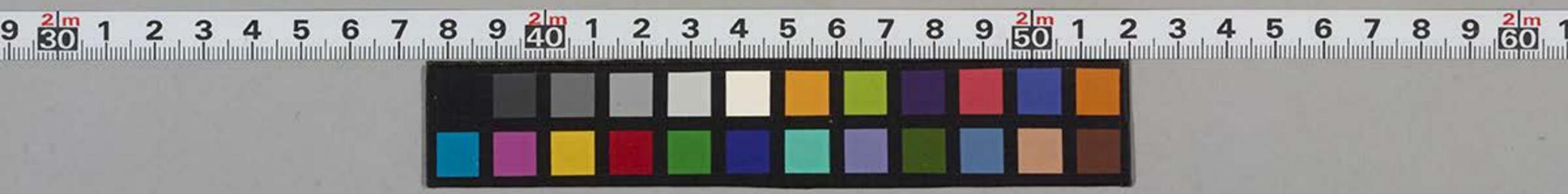
「向う心の深みに於ける隠れたる術」としての純粹圖式

であると言ふことが推測せられる。其れは時

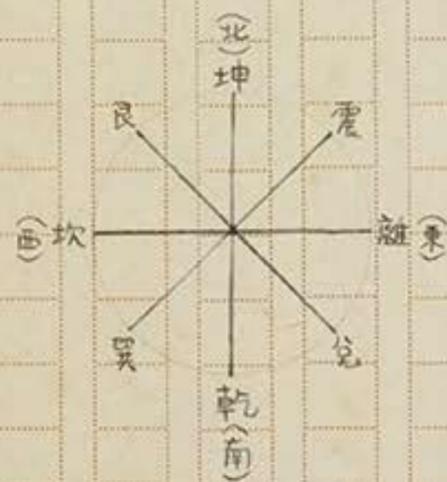
ありて我々がその眞のこつを自然から學び得て之を赤

裸々の姿に於て示すことは容易な業ではなぬ。(B100) 古

十行 廿四字結



若包犧代の天下に王たるや、仰いでは則ち象を天に觀、  
 俯しては則ち法を地に觀、鳥獸の文と地の宜とを觀、  
 近くは諸を身ニに取り、遠くは諸を物に取り。是に始り  
 て八卦を作り、以て神明の徳を通じ、以て萬物の情を  
 類す。(繫辭下傳第二章) 八卦圖は次の如く畫される。



吾々は二、に於いて位置論の圖式的形成に就いて論じ  
 たが、右の圖式と其位置論的圖式とは如何様な関係を  
 示し、且位置論の二軸たる「復利」―「直觀」―「概  
 念」は如何なる姿で此の中にひそんであるであらうか。  
 これ等の事を前章に掲げた先驗的位置論の各項を通じ  
 て説明して行かう。

(一) 先驗的論理学

才二段、二、に於いて攻究した圖式的手續に依り、  
 吾々は前章に於いて分類した此の標題の部門を、カン  
 トの用法に従つて次の如く圖式化する事が出来る。

十行 廿四字結



比的な圖式を作ることが出来る。  
 吾々は、十翼中の次の如き文章を基として、右と類  
 され、カントのあらゆる基本的處理に適應せしめられ  
 たり。

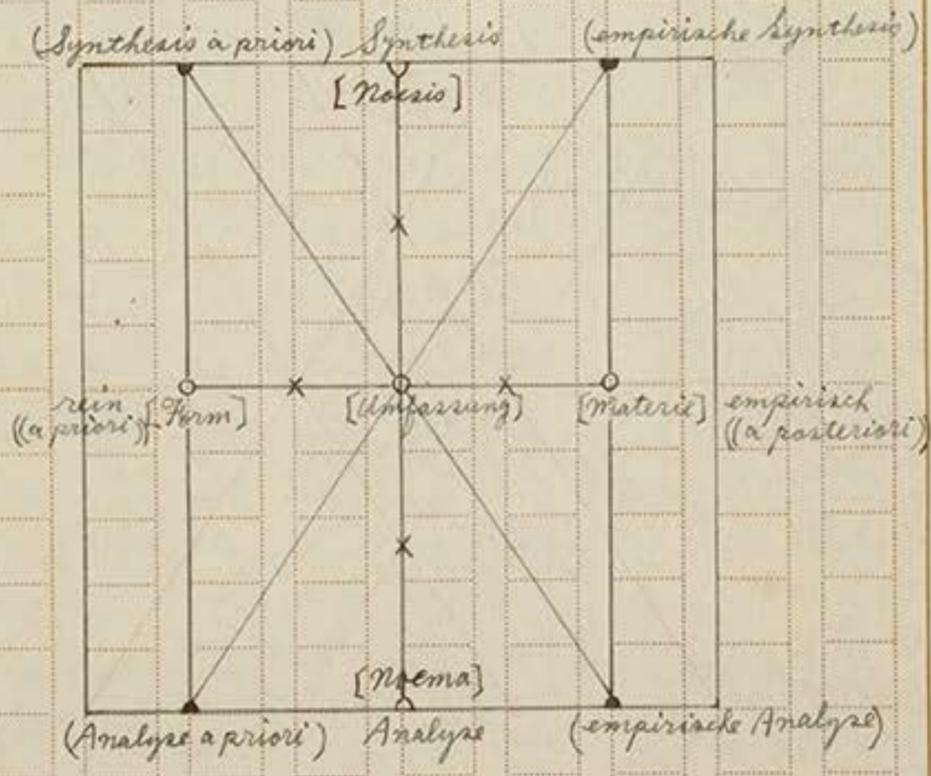
*Metaphysics, Stamm, Umfassung* は、就職論文第一章第二節から採  
 取され、

1. 生々之を易といふ。 [Umfassung]  
 易は思ふこと无きなり、爲すこと无きなり。

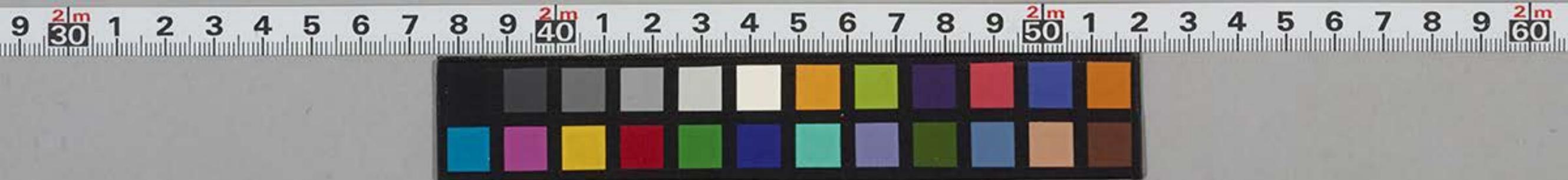
然として動かさず、感じて遂に天下の故に通ず。

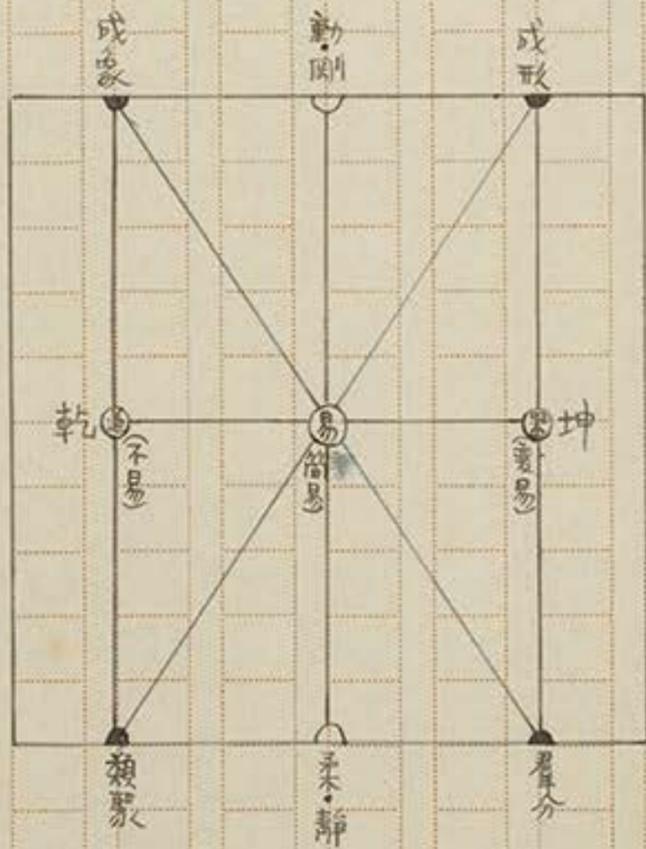
2. 天は尊く地は卑くして、乾坤定まる。卑高以て  
 陳たりて、貴賤位す。 [Form] — [Metaphis]

十行 廿四字詰



(註記---o, ●に位置的な意味はなく、其の軸の両方向性の集約を示す)

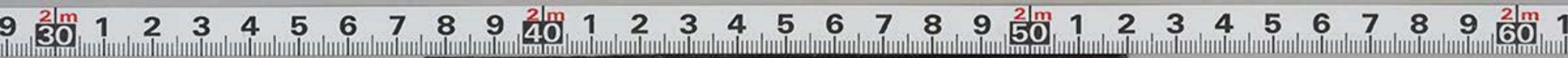




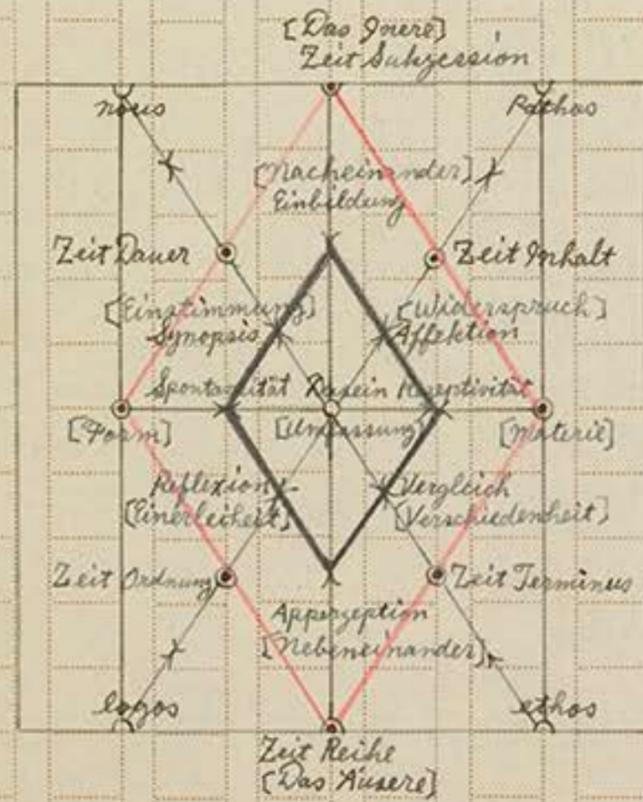
4. 是の故に形而上者〔Form〕之を道と謂ふ。形而下者〔Matter〕之を器と謂ふ。

動靜常有りて。剛柔断る。〔Matter〕——〔Form〕  
 方は類を以て聚り、物は羣を以て分れて、吉凶  
 生ず。 (Analytische opinion) —— (empirische Analyse)  
 天に在りては象を成し、地に在りては形を成して  
 変化見<sup>あらは</sup>る。 (Synthesis a priori) —— (empirische Synthesis)  
 3. 乾坤は其の易の纏か。乾坤列を成して、易其の  
 中に立つ。 乾坤毀るときは則ち以て易を見ること無し。  
 易見るべからざるときは、則ち乾坤或は息むに幾  
 し。

十行 廿四字



(二) 内在的位置論  
 此の章は既述の處理法を(一)の圖式化を土台として  
 次の如く圖式化さすを得る。



[---] は反省概念  
 — 内在の場  
 - - 対象領域

「<sup>+</sup>」 翼中の次の言葉は右と類比的な圖を構成する。

1. 易は思ふこと无きなり。寂然として動かず、感

いて遂に天下の故に通ず。(A) ハイデッガーに依れば、

現存在 (Dasein) は「<sup>+</sup>」に於て「<sup>+</sup>」を示されると言ふ。「<sup>+</sup>」氣分は

そのつど既に世界一内一存在を全体的に南示し、

「<sup>+</sup>」への転向を可能ならしめる。(Heinrich Heidegger, Sein und Zeit, 138)

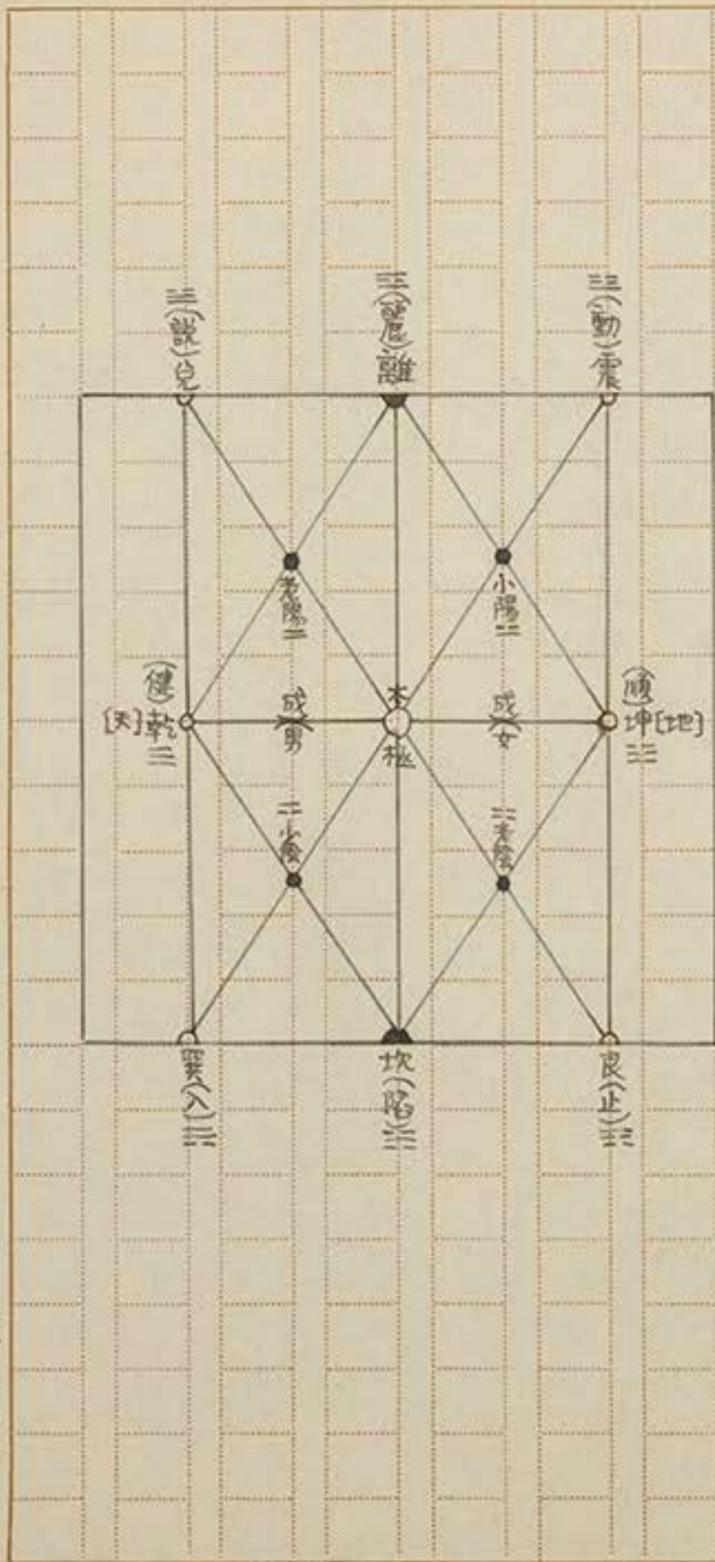
(B) 此の項は、(一) B115 の註に對應する。

2. 易に太極あり。是兩儀を生ず。兩儀は四象を生

じ、四象は八卦を生ず。

易に四象有るは示す所以なり。

十行 廿四字點



十行 廿四字詰

— Regenerativität —

4. 乾道は男を成し、坤道は女を成す。

— Spontaneität —

火射はずして、八卦相錯はる。

天地位を定め、山澤気を通じ、雷風相薄り、水

3. 八卦列を成して象其の中在り。

時間順序、  
一は時間項に相等す

括と謂ふ語は感心できたり、  
二は時間内容、  
二は

の符合は折断性・不連続性を現す。  
二は時間持続

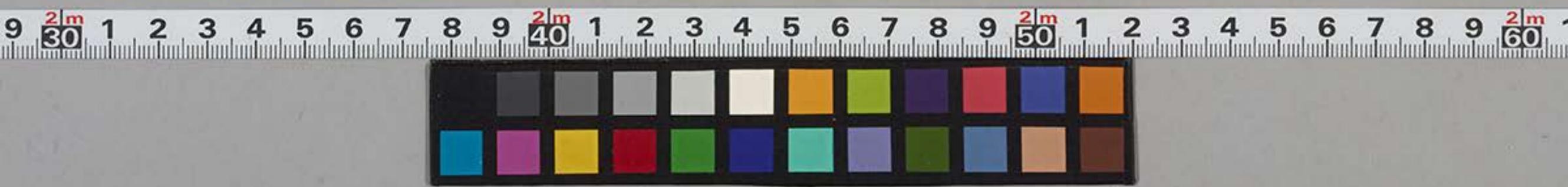
く、即ち円転性・連続性を現すのに反し、  
一なる陰

如く、  
一なる陽の符号は○より転化したるもの、如

文等ゆき文に就いて其の変遷を述

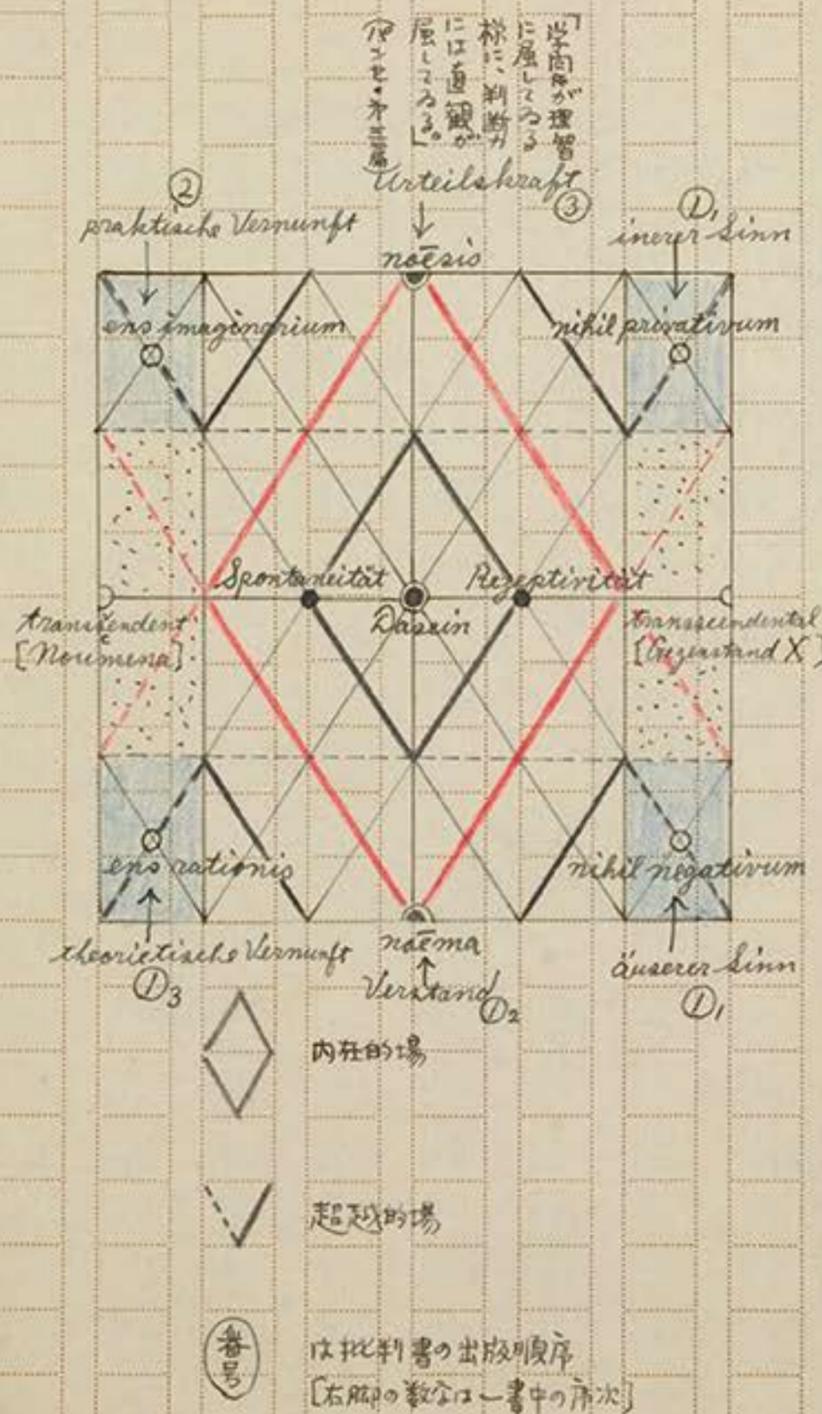
四象とは、老陽(☰)少陽(☱)少陰(☶)老陰(☷)であり、金

易とは象なり。象とは像なり。象は圖式に当る。



(三) 超越的位置論

此の章は次の如く圖式化される。



右の圖式に於いて明きらかな様に、反省概念の極限

概念たる無の概念は多義的であり、しかし其水が力

ントの物自体説と相覆ふことに依つて、物自体の多義

性を惹起してゐる。カント学徒の苦難の範例 (exemplum

curio)とも云はれる物自体の把捉し難き所以は其處にも

存するのどあるが、第一段、二、の無の概念表に就い

て述べた個所で行つた反省概念との联系的處理法及

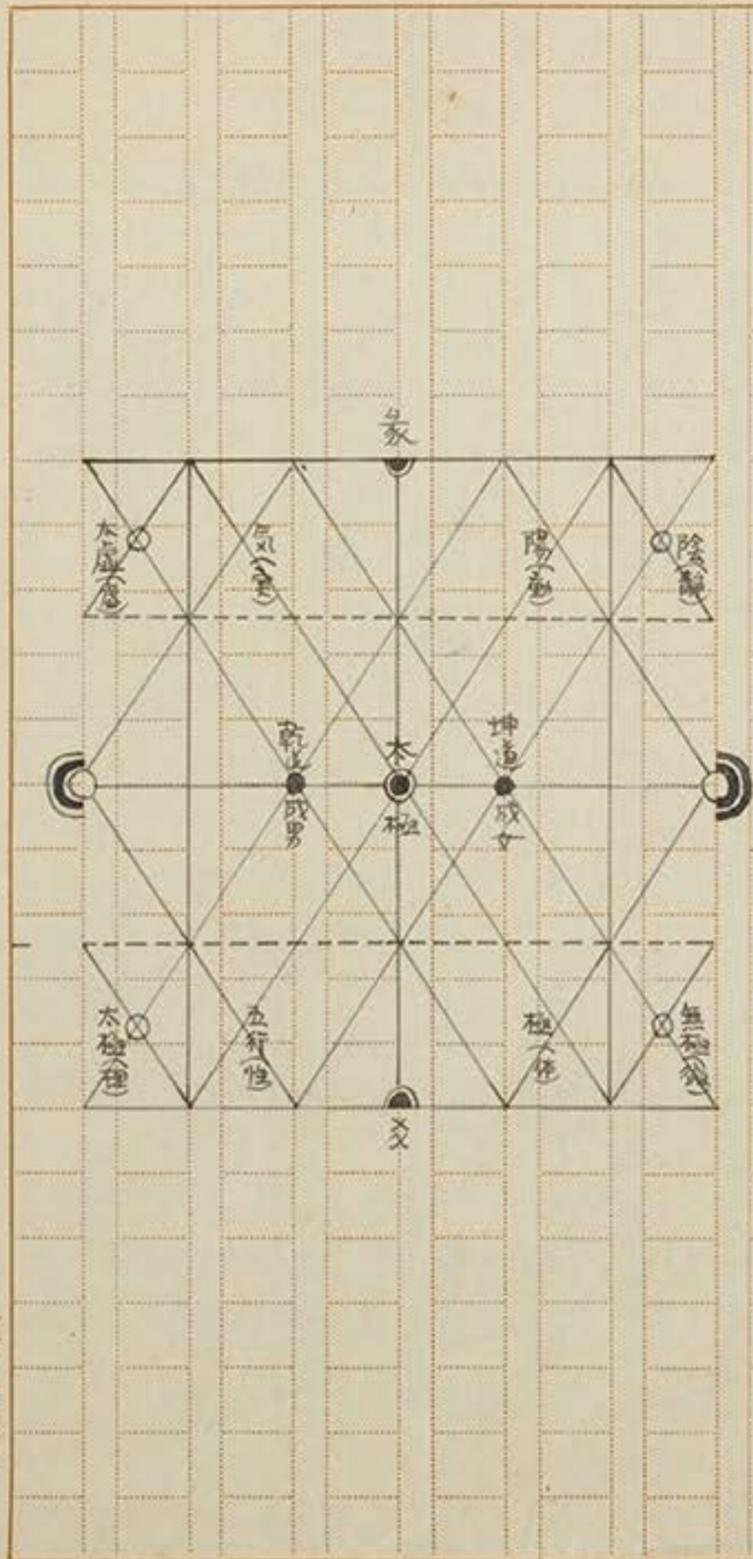
び先驗的論理圖式を土台とせる右圖などを考量せば、

先驗的對象の意義に用ひられる場合をわきまはきりシヤ的

表現におけるへは高坂正顯代の偉意見で、あり、資料の

十行 廿四字點

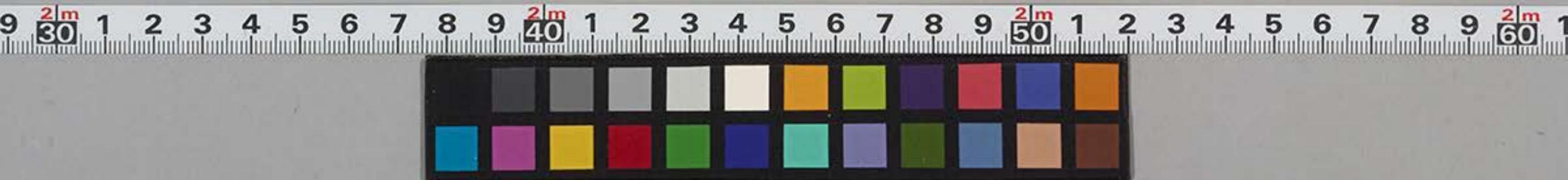




十行 廿四字點

念が或本質的役割を演じてあるのを見る事が出来る。  
 の概念の性格からして、易の体系に於いては斯かる概

貨料があり、可想体の意義に用いられる場合は形式の  
 形式である。カントは、経験的体系の彼岸には「唯  
 のみがあり、吾々日夫を直観によつても、又概念によ  
 つても充つことには出来ない。と言つてみるが、無とい  
 ふものは一つ極限概念として深い思辨からほ切離し  
 難いものがあり、又此の「無」の有つては、其の  
 哲学の礎石となり本質をなす所以の「無」である。カ  
 ントの用いた意味において其れは「限界概念」とも云はれ  
 決して消極的なるに止まらず、常に何等かの積極性を  
 以て「思」を統一し發展させる。ゆがである。其の極は「無」



アリストテレスに於いて原來的存在者は *ousia* (實體)

として會得されてゐるが、此の語は本来「現存即ち直接

に且つ常に現前的な所有を意味するものと言はれてゐる

。此の様に原來的存在者としての「太極」は、本体概念

として「理」と同一的に解される場合もあるが、「生々之を

易」といふ一易は思ふこと无きなり。寂然として動かず、

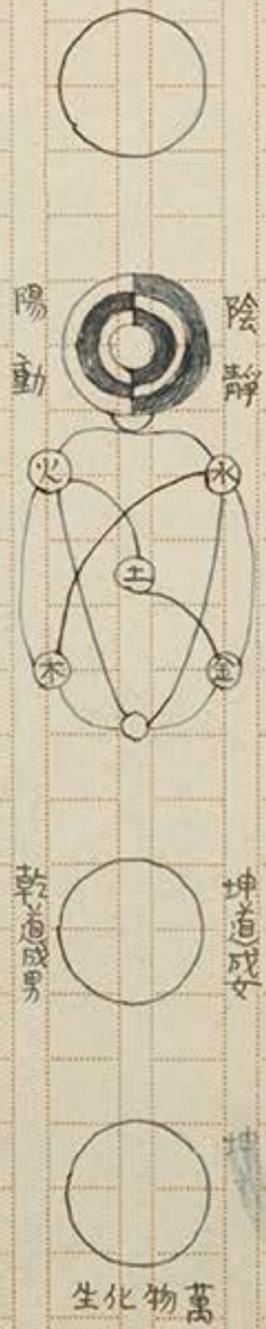
感じて遂に天下の故に通ず。一易に「太極あり」と謂ふ

一連の思想を辿る時、そのつど既に世界一内一存在を

全体的に開示(前提)すると言はれる「氣」的現存の側面

を有つものと思はれる。斯様に「太極」の多義性は、周

濂溪の著名な「太極圖説」に於いて最もよくうかひはれる  
と思ふ。太極圖とは次の如きものであり、



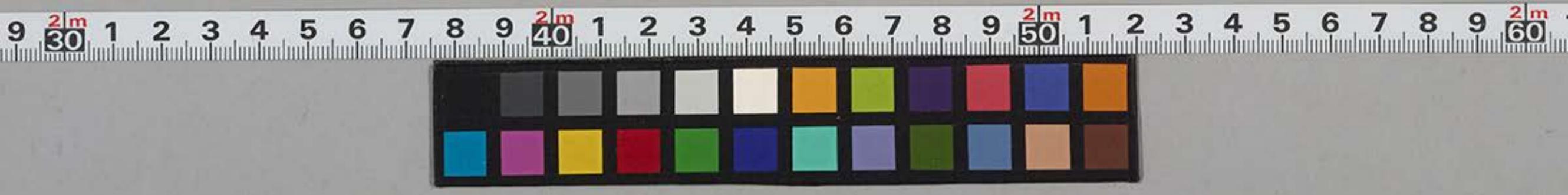
朱子の「太極圖解」には、最上の○が「無極而太極」であること

書かれてゐるが、而して「動いて陽、靜にして陰」なる所以は

「本體である」は○の動いて陽、靜にして陰なるものの

であり、中の○は其の本體であると言はれてゐる。又

十行 廿四字語



朱子は「無極而太極」に註して、  
「上天の載は聲もなき鳥也」  
無し。而も實に造化の枢紐にして品彙の根柢也。と

言つてゐる如く、太極には nihil primitivum, nihil negativum の

如き意義があると共に、才ニ段目の図に見る如く、其

れが木火土金水の五行順序の本体と考へらるる場合には、

ego nativum と同様互意義を有たせられる。「氣は太極に塊然

として升降飛揚し、未だ嘗て止息せず。(正蒙・太和篇才一。

云)「太極にして形無きは、氣の本体なり。(金三)等と謂

ふ言葉を考量せば、氣と太極との關係は略推察せられる

であらう。

(四) 易と存在学原理論

ヘーゲルも其の哲史に於いて易經の原理論的性格并

を指摘し、其處に於いては最も普遍的なる根本概念もしく

は範疇及び形象が述べられてゐる、と言つてゐる。其

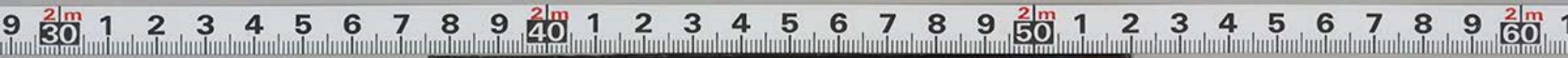
の様に易は日常雜事の吉凶を占ふにも用ひらるる他面、

高き原理性を保持してゐるのである。カント哲学を基

調とした存在学原理論と易との關係に就いては、次の

如き各項に亘つて論究をすゝめたいが、其れは別紙の

十行 廿四字詰



圖式に就いて其の紙上で行はれる方が、繁雜さを避け  
られ、明證性を得らる事と思ふから、此處では項目  
を羅列するに止める。

1. 西洋哲学の最初の芽ざしである古代宇宙論者と  
易の見解の類似性。殊にエムペドクレスに就いて

2. 西洋哲学の創始的完成者たるアリストテレス  
の範疇的思惟と易に於ける八卦。

3. 近~~世~~世<sup>世</sup>哲学の始祖デカルトの偉大なる後継者であ  
るライプニッツの普遍的記号の結<sup>合</sup>せ法と筮法。

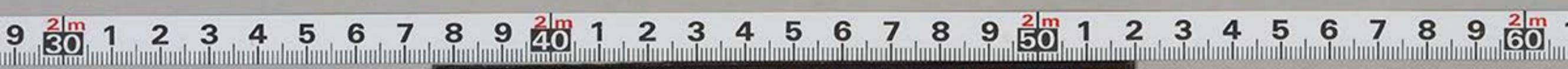
總合法の理念は、ライプニッツの生涯を導いた。  
それは彼の思索の出發点であり、遂に到ることの出

来なかつた目的地であつた。  
4. 以上の如き傳統を継有つ西洋哲学の、近世に於

ける完成者カントの範疇的—普遍学的思惟と易経  
の原理論的性格。

十行 廿四字詰

Kyoto University



才三段 存在学体系

系建築が始まるのである。  
地平は打固められた。今や吾々の体

才一部 先験的位置論

才一章 先験的位置図式(リーマン幾何学に依る)

才二章 先験的認識論(図式に依る)

才一節 先験的主観論(附・時空論)

世界観の主観的形成(性格論)

才二節 超越的客観論

世界観の客観的形成(表現論)

才二部 存在学的原理論

才一章 存在学的原理図式

才一節 多様性の総合的統一(存在学の基礎概

念たること)

(一) 初期宇宙論者達の理念

(二) プラトーンの「他」

(三) アリストテレスの「相質」

十行 廿四字詰



(四) ライプニッツに於ける確立  
 (五) カントの完成(先天的総合判断)

(六) 朱子学の理氣二元論

(七) 西田哲学の多即一

才二節 多様の総合的統一と「トポロジ」

(一) ライプニッツと「トポロジ」

(二) リーマンの純粹数学的手續

(三) ポアンカレの感覺論的解釈

(四) 「トポロジ」の精神科学への近親性

(心理学に於ける採用)

(五) 田辺博士の表象規定(直観は、異質的多様

の内面的統一の連続的無限發展である。)

と、「トポロジ」の空間規定(空間は如何な

る数量的規定から離脱せられた点の多

次元連続体系である)

才三節 存在学的原理図式と「トポロジ」に於け

る「座標」ベクトル、領域の概念

第二章 存在論の原理論

第一節 範疇論

第二節 存在論的位置論

[I] 表象一般の区分論

[II] 存在各論

(1) 個体存在論(身体性の探究)

(2) 社会存在論(実存性の探究)

(3) 超越的存在論(精神性の探究)

才三部 存在論の演繹論

才一章 主観的演繹論(純粹言語系)

才二章 客観的演繹論(純粹自然科学系)

以上が其の設計図である。

構想力 (Einbildungskraft) の主観的統一と統覚 (Apperzeption)

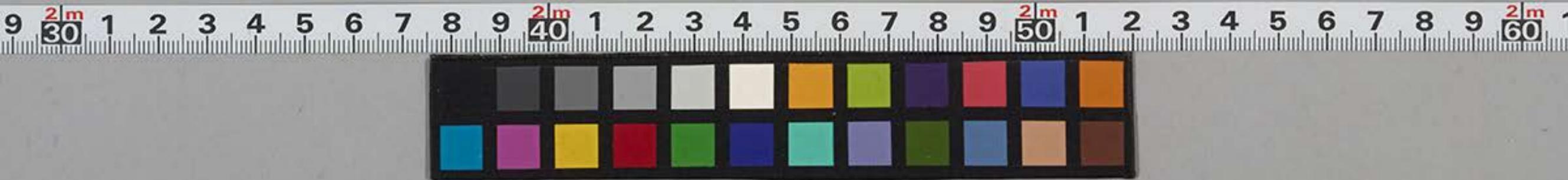
の客観的統一との必然的結合の露呈が、純粹理性批判に於ける先験的演繹論のやまである。一般に演繹論は、

主観的表象と客観的對象との原理的同一性を前提し、其の行使に於いて斯かる同一性を露呈しなればならぬ

ない。斯様同一性の前提はしかし *a priori* に行はれらる

てはじめて露呈の *Reduktion* を可能ならしめる。

十行 廿四字詰



其れ故 *Reduktion* には必ず *primal* な原理が先行しなけれ

ばならぬ。斯様な原理は *Reduktion* の確固不拔たつ基

礎を成し且 *primal* なものである限り、信念とも言ふべ

き断平たる不可拒的根源性を有つべきものであるが、

單なる氣命とか志向こ等にのみ盡きる様なものであつて

は、*Reduktion* に對して不充分である。其れは、其の様

な根源性に強く根ざしながら、一つの澹化と精鍊とを

經た嚴格さを具へてゐるものであらねばならぬ。

*Reduktion* が広範に亘り、且深く存在一般の根に突進め

られ、に從つて、以上の要求は高みへ高みへと持上げ

られる。存在學と謂ふ極みなきこ僭稱を其の名に冠する

此の論案にあつて、學の体系才三部を成す演繹論の基

盤が、突極的嚴密性を以て構成せられた原理論でなけ

ればならぬ所以である。然し乍ら原理論は、あくま

でも才三部に先行し、此の學の才二部を成すべきもの

で、基盤でありながら根源にはなく、又存在學全体を

覆ひ盡くすものであり得ない。其の根源は前にも述

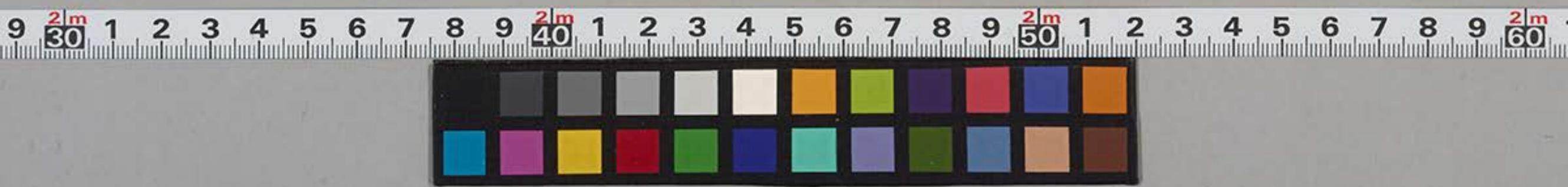
べた様な強く人間の体臭を溢へた氣分的なものに求め

られねばならぬ。そして其れのみが面接的存在認識を

る學の才一部の核心を成すべきである。しかし其の様

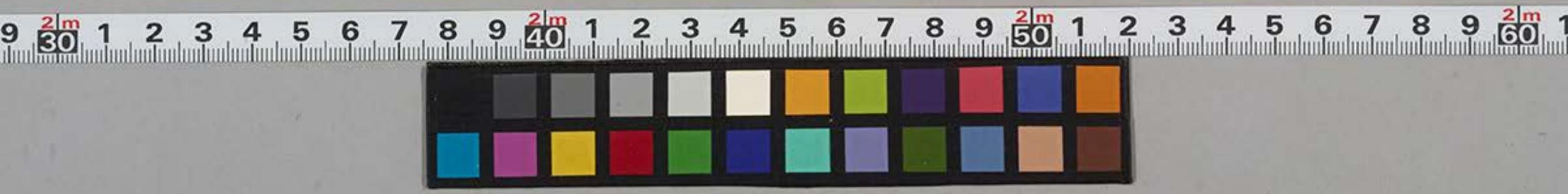
十行 廿四字詰

Kyoto University



日常的具体性も、渦を巻いて進行する中核的雰囲気  
 を突破して遠心的経路をいづれかへ進るとき、  
 細隙通過に依つてスペクトル系列を生ずる如く、  
 中核に於いて、~~混濁~~と融燃してゐたものは特定  
 の志向類型を呈示するものである。先験的位  
 置の認識の電撃を與へることによつて斯様な  
 型を渾沌の中から抽出し且收斂せしむるに  
 必要なり。其れは又核心にひそむる遠心性の  
 主要類型を見極めるところにある。核心が動的  
 であること、いづれかへ進行してゐること、  
 は運動性と方向性の二側面より、時間及び  
 空間性を以て二つの不可缺契機として顯示  
 する。次に「今」及び「此處」の位置性を  
 論ずる。右兩者「時空」の共通原理として見  
 出た「今」は「今」を除く「今」ならざる「今」  
 即ち「過ぎ去つた今」と「未だるべき今」と  
 を黙示する。「今」は「今」の系列は、  
 系列を可能ならしむる秩序を要する。此處に  
 「今」と謂ふ端的な存在表象及び「時空」の  
 系列は依つて、其れが可能素地である。順序  
 性と「項性」の系列の内容たる「今」の「今」  
 とに求められ、斯様に順序性から見れば、  
 下の「項的存在表象が、此處に就いては同様に  
 見られる。之は「項」を定めること、位置を  
 知ることで、

十行 廿四字詰



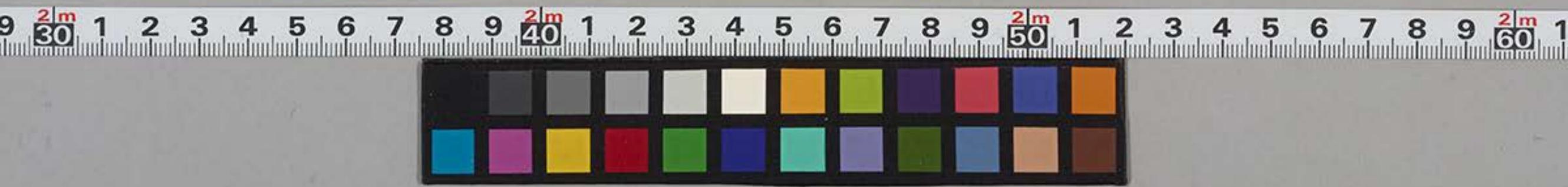


いま、数学ではよく知られてゐるが、哲学では殆んど使はれてゐない一つの概念を哲学に「~~関~~」<sup>関</sup>聯させて考察しようと思ふ。と述べてゐるが、彼は、ライプニッツが微分概念に依つて「~~單~~」<sup>單</sup>子論及び「~~形~~」<sup>形</sup>而上学敘説の基礎理念を把握した様に、此の論文に於て「~~先~~」<sup>先</sup>天的綜合判斷の原理を記号的に把握してゐる。あらゆる側面に於て有限性に纏綿<sup>せう</sup>する者々人間は、認識の最高部門に於て~~その~~對象の現象性<sup>を其の</sup>明證的基礎として是非<sup>を要求する。</sup>を~~非~~常に人間的に~~思~~惟を確固たり透徹たらしむるに役立つてゐる<sup>が</sup>。

「~~彼~~」<sup>彼</sup>が彼自身の「~~哲~~」<sup>哲</sup>学者に「~~三~~」<sup>三</sup>角形といふ概念を與へ、三角形の角の和が直角に對して如何なる關係にあるか、<sup>ら</sup>うか、かれの仕方で見せしめよ、そこで彼の有するものは三直線によつて圍まはれた一つの圓形といふ概念と、この圓形における同じ数の角といふ概念だけである。この概念に於いては、<sup>ど</sup>れほど熟慮しようとも、<sup>何</sup>れも何等の新しいものを導出せぬであらう。直線、角、或は三といふ数の概念を分析し判明ならしめることはできず、<sup>こ</sup>れ等の概念に於て全然ふくまはれて居らぬ新しき性質へ到達することはできぬ。然しながら幾何

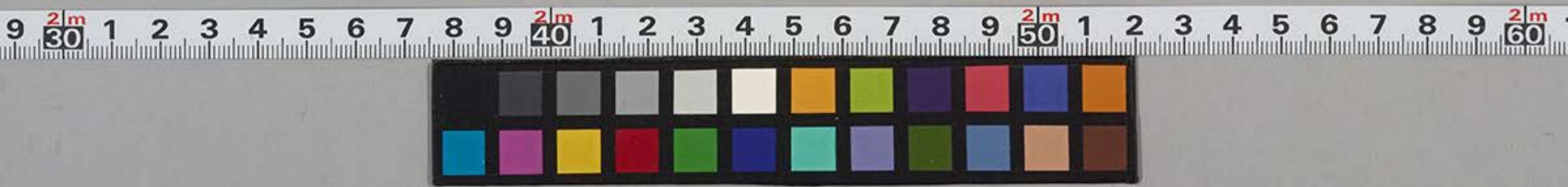
十行 廿四字詰

Kyoto University



学者がこの問題を取り扱ふとせよ。彼は直ちに一つの  
 三角形を構成することに取にかゝる。彼は推理  
 の連鎖によつて、しかも常に直観に導かれて、問題の  
 全く明瞭にして普遍的なる解決へ到達する。(B. 744f.) と  
 云はれる時、孔子が、書は言を盡さず、言は意を盡さ  
 ずと。然らば則ち聖人の意は、其水見るべからざるが  
 と謂ふ自向に對して、聖人象を立てて以て意を盡し、  
 卦を設けて以て情偽を盡し、辞を繋げて以て其の言を  
 盡し、爻じて之を通じ以て利を盡し、之を鼓し之を舞  
 し以て神を盡す(繫辭上傳・才十二章)と自答する時、視  
 象的環えが、ありやう認識にとつて如何に重要なこと  
 であるか、<sup>然</sup>其の定義に於ける據るべき頂<sup>頂</sup>点に於て東  
 西の律則に依り、等しく強調せられてゐるのである。  
 表象の構造と其水の複雑なる機能とを空間に於て視  
 象化し、且其の視象化さ水たものに自己の原理を與へ  
 る爲には、表象の構造を空間の原理に従つて再構成し  
 なければならぬ。幾何学は数千年の歴史の中に、空  
 間的原理の深みを驚くべき明晰さを以て照し出した。  
 番々、其の最も發展せる形式の<sup>の</sup>一つが、再構成に  
 於ける標本を、<sup>に於けるの</sup>幾何学の<sup>の</sup>一つが、再構成に  
 於ける標本を、<sup>に於けるの</sup>幾何学の<sup>の</sup>一つが、再構成に

十行 廿四字跡





次にベクトル  $\vec{OA}$  を  $A$  が表し、其の成分  $(x, y)$  の座標を

$(x, y)$  として此の事実を  $A(x, y)$  と書表し、同様にベクトル

$\vec{OB}$  を  $B$  が表し、其の成分を  $(x', y')$  として  $B(x', y')$  と書表

せば、ベクトル  $A$  とベクトル  $B$  との和は、ベクトル

$A(x, y)$  及びベクトル  $B(x', y')$  があるとき、 $(x+x', y+y')$  を成分

にもつようなベクトルは、 $A+B(x+x', y+y')$  が表すことが出

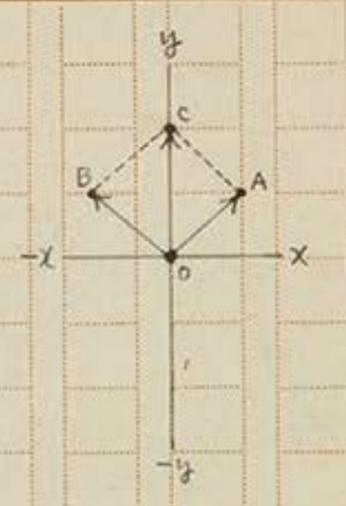
来る。と定義される。斯く定義されたベクトル加法の

幾何学的意味を考へる爲に  $A$  を表す有向線分を  $\vec{OA}$ 、 $B$

を表す有向線分を  $\vec{OB}$  とする。  $\vec{OB}$  を  $\vec{OA}$  に沿ひ、 $O$  が  $A$  に

一致する迄平行に移動する時、 $B$  点の到達すべき位置

を  $C$  とせば(左図参照)  $C$  の座標は  $(x+x', y+y')$  であるから、



(Fig. 2)

有向線分  $\vec{OA}$  がベクトル  $A+B$  を表

すものであることが理解される。

点  $C$  は又  $\vec{OC}$  を  $\vec{OB}$  に沿ひ、 $O$  が  $B$  に

一致する迄平行移動する時に、点

$A$  の到達すべき位置と、 $\vec{OA}, \vec{OB}$  を二辺とする平行四辺

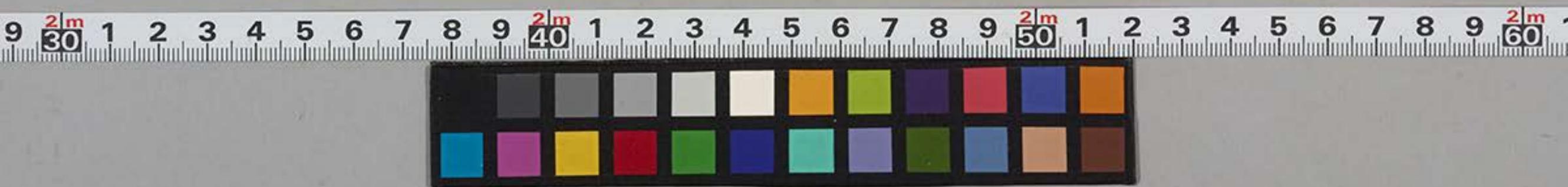
形の第四頂点とも見做すことが出来る。

点  $A$  を此の段の序言的部分が規定した様な意味に於

ける  $\vec{OA}$  の存在論的認識の原点『現在の瞬刻的座標』

象たる時間内容一般を表す負点とせば、 $\vec{OA}$  上を對照的

十行 廿四字詰



$(x-x, y+y)$

集り申す時向持續一般を表す質点の軌跡と云は水得

用所が吾々も、時間的繼起一般に、持續に於ける、瞬刻

的時向内容の多様として規定し得るものなり、此の

事實は、<sup>幾何学的</sup>幾何学的図式で示さず、<sup>その存在概念の性質による</sup>その存在概念の性質による

と、或は即ち現存在のノエシス的關與對象一般を表す

身である。各主体の有する個々の表象座標系か、<sup>この</sup>此の

自の個別的座標系を人格と稱し、其は世界觀及び人

生觀の基盤である。座標原質たる現存在は、<sup>此の</sup>此の

めはじめに於いて指搦した様相術善かの遠心的志向

性を有する。かゝる志向性によりて、<sup>此の</sup>此の

向きとに注目し、吾々は大小、方向、向きを具へ

る量としてのベクトルを表象空間に求めることが出来

る。この可能は、<sup>幾何学的</sup>幾何学的

に吾々は、<sup>幾何学的</sup>幾何学的原理に基づいて、<sup>幾何学的</sup>幾何学的

第一節及び第二節に相当する圖式を別紙第一圖及び

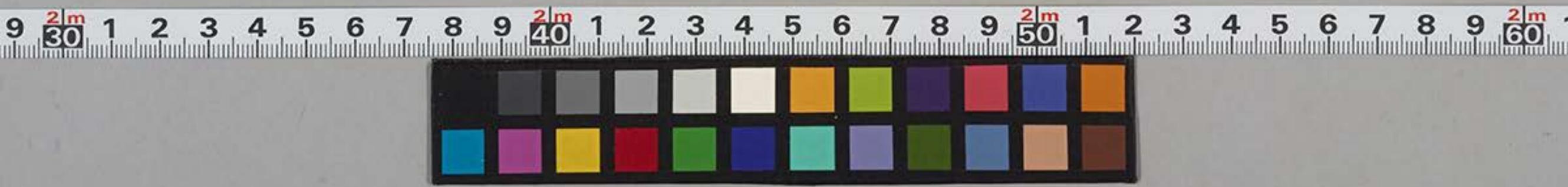
第二圖を右の如く構成し得る。制作することが出る。

第二章 存在論的原理論

第一章 存在論的原理論

十行 廿四字詰

Kyoto University



才一部、才二章の才一節 ~~才一節~~ に相当する図式

別紙才一圖を基礎として、此の部に相等する別紙才三

圖が構成され得る。此の圖は、才二段、四、に於いて

圖示された八卦圖を基とする易の原理圖式と照應し、

四千年の歴史を裏打ちとして其の普遍的な正当性を獲

取するであろう。

存在論的原理論の図式的操作には、次の如きトポロ

ジの基礎概念が必要である。

(一) 包含されること。

トポロジは、部分と全体との関係、更には「包含

されること」の概念に基礎を置く。一つの点について

見れば、その点を「含む」周囲が直ちに向題となる。

(二) トポロジ的空間の方程式

Aによつて表される無数の点、Bに「含まれる」と

き、~~は~~  $A \supset B$  は B が A を「含む」ことを表し、 $A \supset B$

は B' が負料 (A) 及び形相 (B) に依つて合成されたもの

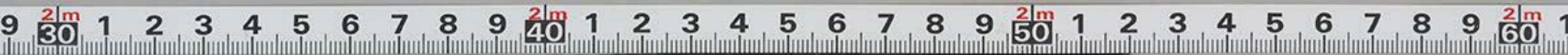
の外延的側面であることを表し、 $A \cdot B = A'$  は A' が合成

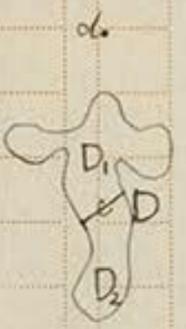
者の内包的側面であることを表す。それ故、空間の

各部分に就いて次の方程式が成立する。

$$A + A = A' = A \cdot A$$

十行 廿四字點



(三) 領域に於ける結合  
 各点が、其小等を包む一定の領域を通路として  
 かつとき、之等の点又其の領域に於いて結合してある  
 といはれる。左図に就いて言へば、  
 a. 点 1, 2, 3 は結合してある。  
 b. 点 1, 2, 3 は各々結合してあるが、  
 c. 点 1, 2, 3 は各々結合してあるが、  
 又 B, C の二領域は結合すべき通路としてその領域を有たぬから無結合である。  
 c. 無結合。トポロジ的等値とは、領域  
 内の結合の不変化を言ふ。  
 (四) 領域の閉・開  
 平面が境界を有するとき、二方向に閉ぢられた領域といふ。面は制限的領域であり、三次元空間は無制限領域であるといふ。  
 (五) 結合の種類  
 領域の二つの境界点を結合し、且つ領域の内部に全く横はる道を横断線(c)と名づける。左図に依れば、  
 a.    
 c によつて D が D<sub>1</sub> と D<sub>2</sub> の二領域に分割され、D<sub>1</sub> 内に於ける点と D<sub>2</sub> 内に於ける

十行 廿四字詰



第二章 存在学的原理論

(六) 單純結合領域に於ける数学的特徴

此の領域の境界は、ジョルダン曲線の性格を有する。一對一の連続せる円の像によつて其の曲線は表はされ、其れ自身に横断する二つの閉ぢられた曲線がある。其れは平面を内部と外部との二領域に分割するといふ特徴を有し、ジョルダン曲線を横断すると結合は成立しない。

f.



g.



あ  
ら  
う。

五重結合の領域と云はれるで

重結合の、g. 図の如き場合は

二重結合の領域と言ふ。かくてf. 図の如き場合は四  
 3. α. 図の如き場合を單一結合e. e. 図の如き場合を  
 合e. 図の如く、C<sub>1</sub>を加へればα. 図と同様の事情にな

e.



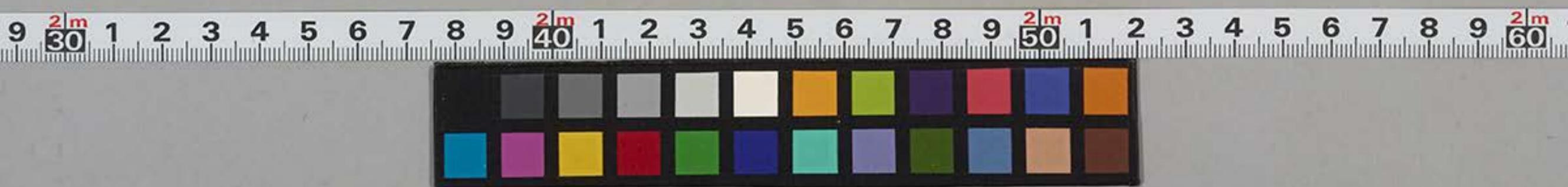
e.



領域Eがn, mの二つの閉ぢられた境界  
 線より成る環状である時は、C<sub>1</sub>は  
 孤立的結合を成さない。其の場

真に孤立的に結合する。しかしながらe. 図の如く、

十行 廿四字

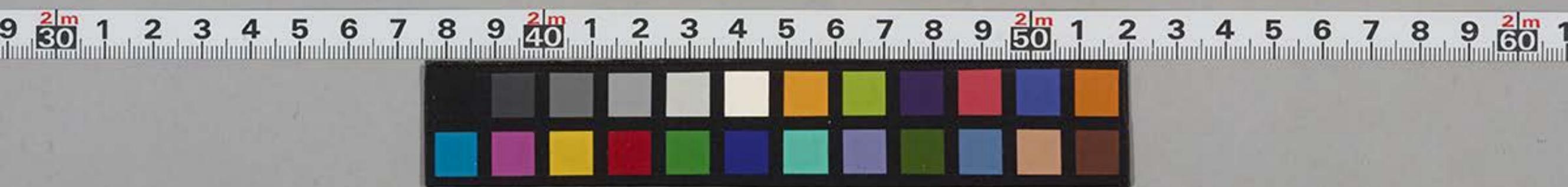


第一節 範疇論

傳数の範疇論者 N. ハルトマンは、普遍的範疇論の基礎付けを目指す論文に於いて、第一哲学の観念、の要求するところは、『主観——客観』原理——具体者たる二對の對立の本末の關係の再興、即ち其等の方向上の交叉、若しくは直交的的位置、これである。意識と對象とは、両者が實際具體者の全然異質的なる二類型である以上、各々自分自身の範疇を有たねばならぬ。

と言ひ、又他の論文でも、範疇圏域は、~~、~~、~~、~~初次的に存在圏域であり得るもので、それが『主観一般』といふ特質を所有する必要は全然ない。問題となるのは、抑々原理の観念性とか實在性とかではなく、唯々その、主観と客観とに對する同一性である。と謂ふ言葉が同様の趣意を表現してゐる。カントに於いて、先驗的統覚の必然的統一の規則とせられ、N. ハルトマンの所謂『主観一般』の領域に歸せしめられてゐる範疇は、彼が立脚地的に主張する如く、現象へ適用すると言ふ、概ね天降りのなものであつてはなからぬ。

Katzenbach と謂ふ語を始源に遡航し  
十行 廿四字



て、裁判乃至述語と謂ふ意味に於いて把へるならば、

~~其の場合、其處に兩つの機軸が透視せらるるであらう。~~

一つは裁判の依據すべき法典乃至述語すべき主語であ

り、他は裁判すべき事件乃至述語内容たる事實である

命題に於ける述語の必然性、主語の抽

象的形式性に就いて語つてみる (Kogito) が、之は裁判に

於ける事件と法典との関係にも類比的に各当する事柄

である。カントの範疇表も注意して観察し、且深い関

心を以て研究した人なら誰でも氣づくことであらうと

思ふが、四綱の範疇の第一項(実在性・単一性・可能性・実作

性)がすべて上の如き意味に於いて法典的若しくは主語

的(心理学的理念)の体系が此の第一項の概念のみによ

つて構成されてゐることに注目すべきである。それは

又 *praxis* なる原理性を指示するものであるに反して、第二項

(否定性)は主語を得てはじめて表象と成る先驗的對象

Xに對應する概念である。カントが此の意味に於いて

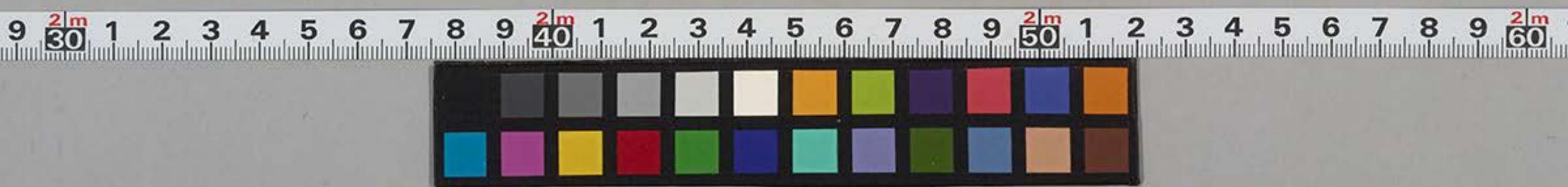
使用してゐることについては、第一、二、に於いて

述べた、数多性・現実性・因果性)はすべて事件的乃至述語的

命令論的理念の二律背反に於いて、反立はすべて之

十行 廿四字詰

Kyoto University



等の概念に基づいてゐる。其れは對象性を指示する性  
格を有してゐる。此處から推察される様に、才三項  
(制限性・總体性・必然性・相互性)にこそ *Kategorien* の成果  
としての判決乃至命題の性格が托されてゐるのである。  
此の才三項に其の本質を有し、然も才一、才二項を構造  
的に含蓄してゐるのが、之等三概念の上位概念たるべ  
き *Kategorie* である。其れはカントに於いて性質分量・様  
相・關係と体系的に組織せられた。彼が純粹理性批判の  
分析論を其處より展開し其處に集中した斯くの如き範  
疇表は、純粹理性の先驗的誤謬推理及び二律背反の批  
判據点となり、ひいては以後の批判的諸勞作の基礎を  
も成すに至つたのであるが、其れが形式論理学の  
判断表に基づいて構成されたと謂ふ事實は、彼の体系  
系に於けるアキレスの踵として指摘され、其の事は又  
此の表に對する一般の消極的態も度を結果した。然し  
乍ら極端な場合を考へて、カントの哲学体系を範疇表  
に對する何等の注目なしに理解せんとする者を見出す  
ならば、吾々は問はねばならぬ。就職論文に續く約十  
年の沈黙は、一体何に捧げられてゐたのであつたか、彼  
を獨斷のまどろみからよびさましてくられた先縦として

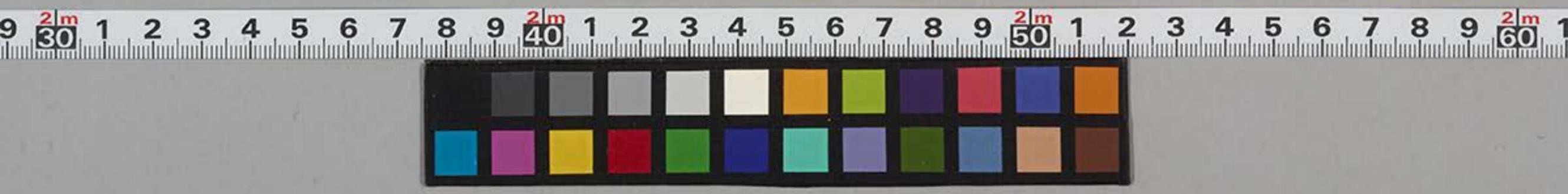
十行 廿四字詰



あり程に畏敬したヒュームへカントはヒュームを懐疑論者の  
 代表として批判的見地の下位に組み入れてゐるが、プロ  
 レゴメナの序文では其の様な理論上での上位下位  
 を起えた畏敬の念が彼の人間的情感を溢へて述べられ  
 てゐるため、範疇表の構成を抜きにしては如何程の價値  
 を有ち得たであらうか。と。関係範疇の才二項因果性  
 は、實にヒュームの與へた暗示に基づいて、範疇表構成  
 の重要な礎石となり、形而上學が全然斯かる概念のみ  
 から成立してゐることを發見したカントは、就職論文  
 に於いて獲取した素地を、數學的嚴密性を以て構成す  
 る事が出来た。此處に、範疇の特別な体系の無い間は  
 避けられ得なかつた（プロレゴメナ・才二編・三九）理念と  
 悟性概念との混淆は、明晰に其の辨證性を指摘せられ、  
 即ち純粹理性の批判をはじめめて可能的となつたのであ  
 る。因果性のみに閉ぢられた視野に懐疑の境界を與へ  
 て、先天的悟性機能を全般的且体系的に把握すること  
 の出来た彼は、今や広大な批判の野に驕り出でる。其  
 處では懐疑を経て充分に打固められた獨断は許容せら  
 れ、學問はつねに獨断的である。と宣言される。實在  
 性、單一性、可能性、實體性等の先天的形相概念は、

十行 廿四字

Kyoto University



其處に於いてのみはじめて批判的に適正な姿で顯示される。即ち、懷疑の熔爐を経ない其等の概念は、心理学的理念の体系に於いて先驗的誤謬推理を指摘され、單なる仮象なり。と十字架に付けられるが、同時に其事自身に依つて批判の野に復活の奇蹟を行ふのである。かの因果性は、閉ぢた懷疑の野に於いて、否定性、教多性、現實性等を引具して現れる。純粹理性の二律背反に於ける反定立こそは實に其の閉ぢられた懷疑の野で空洞にこだまする彼等の歌声であつた。カントは此の鬼々迫るこだまに魅されはした。其の吸ひ込まれる、思ひを深淵の岩頭に断片として持ちこたへた。合理的心理学の完璧な体系と二律背反の定立とへの根強い愛着が其事を完遂せしめたのである。幼時にやさしいお母さんから深く／＼植え付けられた宗教の世界、就職論文に於いて既に其の結晶軸を遠見透してゐた「理想界」は前の者と結びつき、冷徹な迄の常識性と生活環境や時代的趨勢に依つて固く築き上げられたコスモポリタニズムとは後の者としてしっかり結びついてゐた。青年期に於ける自然科学的精進は、彼自身の言ふ様に、寧ろ此の様な生得的とも言ふべき性向に對する意識し

この制約であった。

才二節 存在学的位置論

才三節 存在学的演繹論

才三節 存在学的演繹論

存在学的演繹論の解くべき課題は、如何にして表象と対象との一致は可能なるか、若しくは、主観及び客

観の原理的同一性は如何にして可能なるか。と謂ふこ

とびある。しかし其の前に申すべき事柄、表象と對

象、主観と客観との對立は如何にして可能なるか、か

向は水取ればならぬ。量子力学の理論的素地を確立

した「不確定性関係は、対象への表象の滲透、否主観と

客観との不確定性を示し下ろしてゐる。又一般に主観と

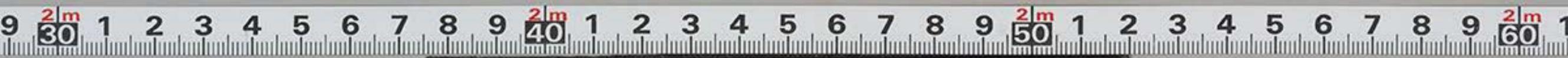
と等置される「意識の中に既に客観性が保持されてゐる

ことをリッケルトは明澄に指摘してゐる。吾々は主観

と客観、表象と対象を、行為に依つて性格づけられ

る主体の、二つの視方向の極限として考へるのが最も

十行 廿四字節



妥当な見方であらうと思ふ。此處に行為を中核とした  
二つの「転出」が考へらる。斯かる行為の根柢把握即ち

原理的認識こそは存在学的原理論であり、  
「転出」の考へられ

は新たに「存在学的演繹論」の領野を開く。ホリス形成以  
前の人類は対象への「転出」を、ホリス形成期及繼承期の

人類は表象への、又ホリス破壊、否ゴスモホリス形成  
期の人類は再び対象への「転出」を行つてゐる。此の事は

歴史的考察に屬することであるが「転出」の構造を知り  
に重要な事柄である。一三を備は「存在学的客観的演繹」  
二を「存在学的主観的演繹」と名付けよ。

言語は純粹なる「存在学的」主観的演繹である。そこで  
は外界と區別せられた、リツケルトの所謂「精神物理的」

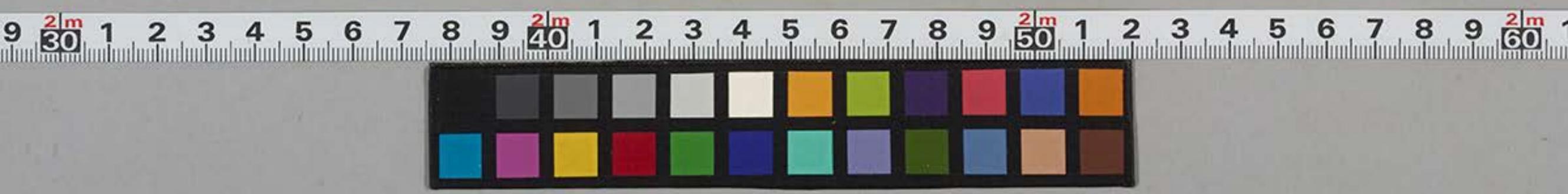
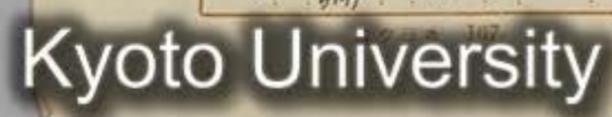
主観が基調となつてゐる。多様な身体的感受は、種  
々なる感覚と情緒、知覚と想念を生み、其等の諸表象

は、各々の相關機能を個々例に就いて「顯揚」する。言語  
は、各々の「顯揚」の記号として各表象機能の屬性を種々

の側面より照出するものである。其れ故、言語に依つ  
て表象を類別し、其れに對應する存在者を斯かる類別

に従はしめんとするアリストテレスコラ的存在論  
を生じ得る。言語には、感得たこと、考へてゐること、

十行 廿四字點



爲したといふこと等主観的表象を表出し、其れに依つて同  
 一對象に對しては同様の感じ方、考へ方、行動を有する  
 ものと考へらるる存在者に自己の表象を傳達し、自己  
 と同一的な状態に誘き入らんとする意図——共感論  
 證 協同の意図——がある。  
 之に對して客観的演繹たる自然科学的法則は、精神  
 物理學的に主観に對峙する空間時間的客観を基調とする。  
 其れは、自然物の凡ゆる作用よりなる現象が人間の心  
 性に押し壓し與へる型である。其れ故、其の型に即し  
 て自然現象を類別し、其れに對應する存在者を斯かる  
 類別に従はしめる実證論が可能となる。主観的演繹に  
 於いては案既に述べた如き事情に基いて実念論乃至唯  
 名論が生じることが、此の客観的演繹に於いては先づ主観  
 を非主題的に、~~事象の背面に~~しり分け、~~外~~  
 的現象を觀察し、次いで人間と謂ふ外的存在の一類に  
 自己在投入するのぞ、實在論乃至唯物論が生じる。自  
 然科學的法則には、生起した事、生起しつゝある事、  
 生起を予想せらるる事等客観的現象諸事象を正確に表  
 出し、其れに依つて同一條件に對しては同様の現象を  
 惹き起すものと考へらるる存在者に適用して其の様な

十行 廿四字詰

Kyoto University



状態に誘き入れんとする意図——実験、実證、实用の  
意図——がある。

別紙才四圖は主観的演繹を、才五圖は客観的演繹を、  
存在学的原理論の二つの転出として、~~図~~存在学的原理圖  
式に従ひ圖示したものである。

Kyoto University

